Ⅶ まとめ

1．縄文時代

1）縄文土器

大野田遺跡では後期前葉の遺物が主体的に検出された。宮城県では後期初頭から前葉の土器型式を南境式と呼称している。仙台湾でも名取川下流域に位置する大野田遺跡付近では後期南境式の良好な資料が多数検出されている。六反田遺跡〔仙台市教育委員会 1987〕（以下、六反田遺跡〔1987〕と略す）では大木 10 式に後続する、方形区画文系土器に代表される後期初頭の第Ⅰ群土器から、後期前葉の縦手文や磨り消し縄文に移行する第Ⅱ群土器への変遷が示され、下ノ内浦遺跡〔仙台市教育委員会 1996〕（以下、下ノ内浦遺跡〔1996〕と略す）では六反田第Ⅱ群土器に後続する、沈線文が多条化する土器群が認められ、これらの中には新潟県を中心とする、南三十稲場系土器と同系統の土器が一定量認められる。同遺跡では細沈線化した多条沈線文が認められる土器群へと変遷し、十腰内 1b 式または大湯式とされる東北北（中）部系や堀之内２式系土器も少量現われる。山口遺跡〔仙台市教育委員会 1981〕（以下、山口遺跡〔1981〕と略す）では東北北部系や堀之内２式系などの異形統土器の出土量が多くなり、伊古田遺跡〔仙台市教育委員会 1995〕（以下、伊古田遺跡〔1995〕と略す）に代表される後期中葉宝ヶ峯式土器の成立の要因とされ、王ノ壇遺跡〔仙台市教育委員会 2000〕（以下、王ノ壇遺跡〔2000〕と略す）で定形化された宝ケ峯式が出土する。大野田遺跡では東北北部系の土器や堀之内２式系後半期の土器が特定の器種に多く認められる。

大野田遺跡で検出された東北北（中）部系の土器は文様構成がかなり変容しているものが多く在地で製作されたものと思われ、北部系の要素を備えた南境式土器と考えられる。堀之内２式系の土器は器形・文様構成などはほぼ同様なものが多いが胎土は在地のものとあまり変わらず搬入品の可能性は低いものと思われる。

ここで後期初頭から中葉の初期段階までの異系統土器群についてみておきたい。後期初頭の主に前半段階（以下、南境Ⅰ-1 期と呼称）では中期末葉大木 10 式系から漸移変化した方形区画文系土器が主体を占める。また岩手県南部を中心とする門前式と同系統の土器が認められるが、広義の門前式は方形区画文系土器などを包括し、狭義の門前式が主体とならない地域もあり、狭義の門前式は後期前葉へ続く一類型と考えられる。岩手県南部から仙台湾にかけての地域は大木 10 式系から漸移変化した土器が主体となる地域と考えられる。

後期初頭の後半段階（以下、南境Ⅰ-2 期と呼称）では福島県を中心とする綱取Ⅰ式後半段階から綱取Ⅱ式初期段階の土器、、新潟県を中心とする三十稲場式土器が散見され新潟県を含む東北地方南部との融合が開始され始める。六反田遺跡〔1987〕の三十稲場式土器（前掲報告書 第 140 図 2）は器形・文様構成から搬入品の可能性があり、新潟県では新段階に比定されているものである。この時期は後期前葉への移行期と捉えられる。

後期前葉の前半段階（以下南境Ⅱ-1 期と呼称）では方形区画文系土器は衰退しはじめ、綱取Ⅱ式系の縦手文や磨り消し縄文が見られるようになり、この段階では仙台湾を含む県南部を中心に綱取Ⅱ式土器圏内に入る。多条（太）沈線文段階（以下南境Ⅱ-2 期と呼称）では前半段階では綱取Ⅱ式土器を中心に推移し、主に後半段階で新潟県域を中心とする南三十稲場系土器との交流によって、多条沈線の細沈線化が始まるものと思われる。また内面に格子目状沈線文を施す深鉢がこの時期に出現するものと思われる。

後期前葉の後半段階（以下、南境Ⅱ-3 期と呼称）では細沈線化した多条沈線文や櫛歯状工具を使用する細沈線文（以下、櫛歯状沈線文と略）が主体となりはじめ、綱取Ⅱ式系の土器も残る。後期前葉の終末段階（以下、南境Ⅱ-4 期と呼称）では細密化した多条細沈線土器が主体となり、後半段階を中心に東北地方北部系の土器が流入しはじめる。これらの系統の土器は岩手県や秋田県南部地域では前段階の土器（十腰内 1a 併行期）はほとんど検出されないが、南境Ⅱ-4 期後半頃になると仙台湾まで南下する。器種では深鉢形土器や壺形土器・脚部に透穴を有する台付鉢形土器が中心となる。またほぼ同時期に堀之内Ⅱ式系の主に後半期の土器が東北地方の宮城・山形県域まで浅鉢形土器や朝顔形の深鉢形土器を中心に認められる。

後期中葉の初頭段階では加曽利 B1 式系の浅鉢形土器が出土している。伊古田遺跡〔1995〕では本遺跡を介して北部系の土器が形式変遷していく様子が見てとれ、加曽利 B1 式系の土器も認められる。また、この段階で内面に格子目状沈線文を施す深鉢とともに、櫛歯状沈線文土器や多条沈線文土器がほとんど見られなくなる。また仙台湾で多く

存在していた撚糸文が地文としてほとんど見られなくなる。後期前葉に関東・東北地方で卓越した土器底部の敷物圧痕は引き続き存在する。土器への施文は地文を含めて横位施文が中心となる。

以上のことから、今回の調査で出土した土器は大きく次の3群に分類される。

大野田遺跡出土土器

第Ⅰ群土器　中期中葉～末葉土器

大木式土器は遺構も検出されず破片資料で流れ込みと考えられる。

1類土器　中葉大木8b式土器

渦巻状の隆線文が見られる。8b式でも新段階と思われ、9式に下るかも知れない。

2類土器　後葉大木9式土器

3類土器　末葉大木10式土器

第Ⅱ群土器　後期前葉土器

1類土器　南境Ⅱ-1期土器（綱取Ⅱ式前葉・宮戸1b式系前葉併行土器）

2類土器　南境Ⅱ-2期前半土器（綱取Ⅱ式中葉併行土器）

3類土器　東北北部系統の土器（主に南境Ⅱ-4期併行土器）

a　横位を中心に展開する沈線文が主体の土器

b　頭部などに原体側面圧痕文を施す土器、縄文施文の土器

c　頭部などに綾状体側面圧痕文を施す土器、撚糸文施文の土器

4類土器　堀之内2式系の土器（主に南境Ⅱ-4期併行土器）

5類土器　東北南部系の土器（主に南境Ⅱ-2期後半～Ⅱ-4期土器）

a　南三十稲場系土器・綱取Ⅱ式系土器・多条細沈線文土器

b　櫛歯状沈線文土器

c　内面に格子目状沈線などを施文する深鉢形土器

d　無文の中・小形土器

e　主に横位平行沈線を主体とする土器

f　縄文や撚糸文など圧痕文を施さない地文のみの土器

g　特殊土器

h　突起類・蓋形土器・注口部

第Ⅲ群土器　晩期中葉土器

晩期中葉の大洞C_2式土器。同一土坑内出土。雲形文の浅鉢形土器と同一器形と思われる底部片。C_2式でも古段階と思われる。

大野田遺跡では中期と晩期の土器が見られるが主体は南境Ⅱ-3期からⅡ-4期で、南境Ⅱ-1期・Ⅱ-2期や後期中葉の初頭段階と思われる土器も一定量存在する。

以下、特徴的なものについて記す。

【東北北部系の土器】（第366～369図）

深鉢の器形は頸部で内湾しながら立ち上がり口縁部は外反するものが多い。横位に展開する沈線文が主体となる。東北北部では地文に単節縄文を施文するものが多いが、本遺跡では深鉢形土器と共に主体となる壺形土器や台付鉢形土器を含め、地文に撚糸文を施文するものが一定量含まれる。また粗製土器の頸部付近に施文されることの多い原体側面圧痕文も見られる。時期は北部系でも最も新しい段階に近似しており、南境Ⅱ-4期後半を中心とするものと思われる。撚糸施文のものには綾状体圧痕文が認められるものがあり、器形は東北北部系に近い。伊古田遺跡〔1995〕では口縁部の外反が強くなる深鉢形土器や壺形土器に原体側面圧痕文が多用される。口縁部の外反が強くなる深鉢は（第241図2）など本遺跡でも少量見られる。402埋設土器に使用された大形の壺形土器（第51図1）は器形も広口壺形に変化し、内面口縁部に沈線が見られるが文様構成は北部系に近似する。

【堀之内２式系の土器】（第 369 ～ 370 図）

主に朝顔形のやや小形の深鉢や中・大形の浅鉢が見られ、突起が付くものもある。大形の浅鉢の内面には文様が発達し、燻され黒色化したもの（第 257 図 1）等も存在する。内面口縁部に沈線文が見られるものが多い。器形としては鉢形でも器種の系統性から浅鉢としたものもある。主に堀之内２式後半段階のものが主体と思われるが、口縁部が内傾する浅鉢（第 155 図 1）があり、後期中葉に含まれるものの可能性がある。北部系の土器に対して堀之内２式系の土器は比較的直接的に入ってきたように思われる。

【南三十稲場系の土器】（第 371 図）

深鉢が主体で頸部から胴部にかけて括れる器形が多い。下ノ内浦遺跡〔1996〕では綱取Ⅱ式系土器の影響を感じさせる南三十稲場古段階と思われる南境Ⅱ -2 期後半からⅡ -3 期前半頃の土器が一定量出土し、新潟県南西部を含む東北地方南部との交流が窺える。主に南境Ⅱ -3 期後半からⅡ -4 期前半には新潟県を含む東北地方南部の土器と融合し多条細沈線文化する。渦巻文・刺突文・矢羽根状文・多条（細）沈線文などからなる土器群は南境Ⅱ -4 期を中心とするものと思われる。

【内面に格子目状の沈線文を施す深鉢形土器】（第 372・373 図）

内面に格子目状沈線文を施すものが主体であるが、格子目にならない櫛歯状沈線文のものや内面に縄文を持つものもある。器形は口縁部が緩く開くものが多く、ほとんどが器高 25cm 前後の中形で、器厚が 10mm 以上で、重量感があるものが多い。内面の格子目は企画性があまりなく、やや密に施文するものや間隔をあけるものがある。底部には施文されない。外面は通有の深鉢と変化はないが櫛歯状沈線文や格子目状沈線文を施すものもある。内面には明確な二次被熱痕や磨り痕跡などは認められない。分布は仙台湾に中心があるものと思われ、下ノ内浦遺跡〔1996〕、山口遺跡〔1981〕、本遺跡の出土量が多い。他に宮城県内や山形県内で散見されるようである。時期は南境Ⅱ -2 ～ 4 期が中心になると思われ、伊古田遺跡〔1995〕では出土していない。

【櫛歯状沈線文土器】（第 371・372 図）

櫛歯状沈線文土器は仙台湾を中心にする土器群と思われ、３条から５条を１単位とするＳ字状の縦位施文の土器群（第 192 図 6）等が南境Ⅱ -2 期後半頃に出現すると思われる。多条沈線文土器と似た変遷をたどり、南境Ⅱ -3・4 期を中心に地文を持つ土器群も現れ（第 193 図 1）等、南境Ⅱ -4 期後半では多条（細）沈線文土器と一体化するもの（第 251 図 1）等が現れる。その後櫛歯状沈線文土器は後期中葉以降粗製土器として一定量存在する。

【特殊土器】（第 377 図）

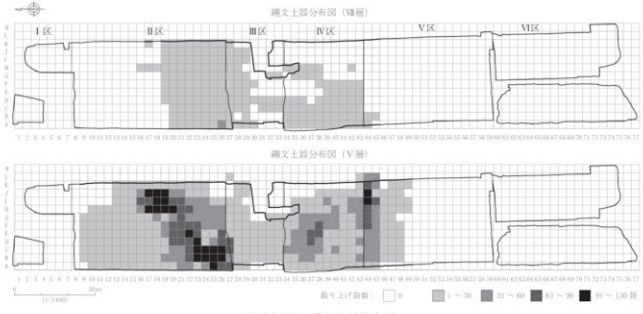
特殊土器としたものの中に内面底部に棒状の突起を持つもの（第 31 図 1）等や、体部と突起に接して棒状のものを懸架するもの（第 262 図 1）、内面体部に突起〈把手〉が付くもの（第 162 図 2）等がある。底部に棒状の突起を有するものは内面に二次被熱痕が顕著なものがあり、特殊な用途が考えられる。器形的には片口鉢形のものが多い。４か所の貫通孔のあるもの（第 205 図 7）も土器内部に付く突起と思われる。他に三足状の脚を持つもの（第 205 図 8）もあり、尖底状の底部のもの（第 262 図 5）はやはり三足状の脚付き土器になる可能性がある。体部中央がドーナツ状となるもの（第 162 図 3）は多人数に液体を注ぐことに特化した器形と思われる。また小形の浅鉢の中には口縁部に貫通孔を有するものや焼成後の穿孔を持つものがあり、いわゆる注口付き浅鉢の形骸化したもので、中形の堀之内２式系の浅鉢（第 151 図 4）にも存在する。

大野田遺跡の土器を俯瞰すると、土器作り集団の移動を前提とするよりも在地集団が器種を選別しながら異系統の土器を積極的に選択して取り入れた可能性が強いように思われる。堀之内２式系の浅鉢は出土量も含め特に目立つ。北部系の土器には地文に撚糸文も採用されている。異系統土器の胎土にも在地土器との差はあまり感じられない。後期前葉には北海道南部から東日本全体に広域なネットワークがある程度出来上がっていたものと考えられる。本遺跡に限らず東北地方の南部が中心となっている可能性が強い。これらが後期中葉の土器形式の成立に大きな影響を与え、細部では異なるが手稲・宝ケ峯・加曽利Ｂ式の広域土器圏が出現する大きな要因になると思われる。

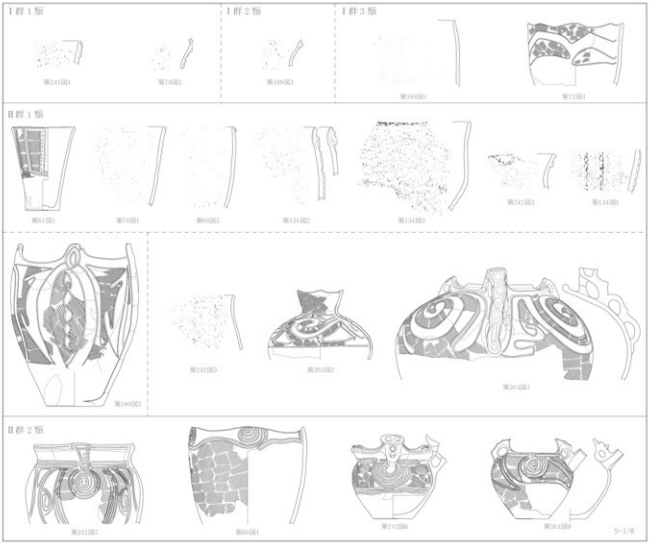
本遺跡の主体となる時期は南境Ⅱ -3・4 期となる、本遺跡のⅤ層とⅦ層は間層も含め比較的短時間で形成されたものと思われ、層位での時期区分はできなかった。従来多条沈線文は堀之内１式新段階併行の綱取Ⅱ式新段階と捉えられていたが、南三十稲場系土器との交渉を含めてより縦位細沈線化し南境Ⅱ -4 期前半に至るものと思われる。南

境Ⅱ−4期後半にはこれまでの縦位施文主体のものから、東北北部系や関東系の土器を介して横位施文化が進み、後期中葉初頭にかけて融合個体（145図4）等も出現し伊古田遺跡〔1995〕に見られる土器群へと変遷する。

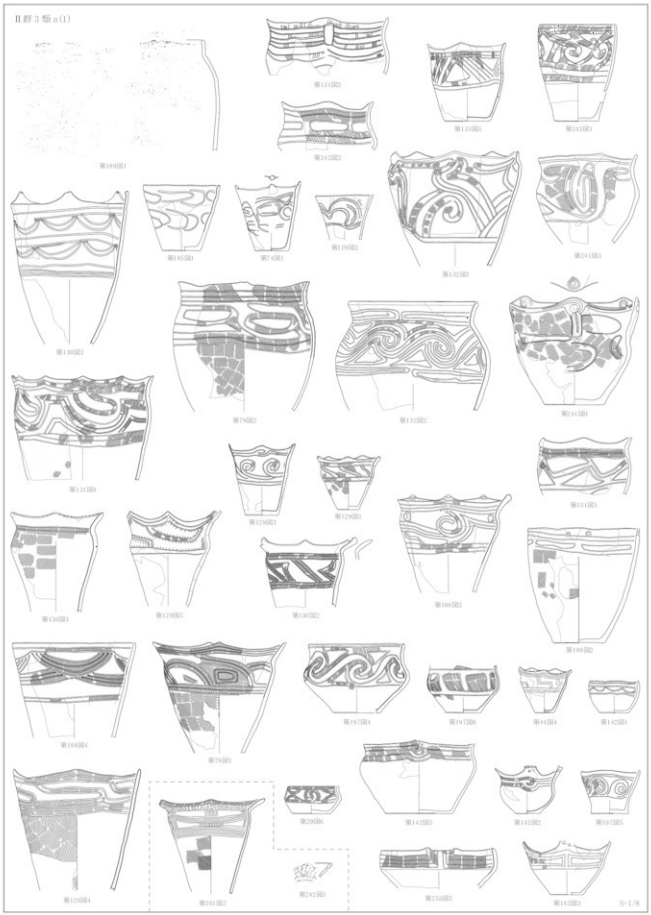
縄文時代中期大木式の中枢部であった仙台湾は南境Ⅰ期を中心に大木10式系の土器群が残る。南境Ⅱ−1期以降東北地方南部を中心とする大木式土器周縁地帯から変化した土器の流入が多くなり始め、南境Ⅱ−2期後半以降新潟県を含む東北地方南部地域との交流が進み、南境Ⅱ−4期後半を中心に大木土器様式外縁部の影響を強く受け大きく変化し後期中葉土器様式が成立する。東北北部系の土器は変容・在地化を続けながらその後も一部南下し福島県の後期前葉終末期から中葉初頭土器に影響を与え、加曽利B1式と接点を持つ。加曽利B1式系の土器は主に浅鉢形土器が東北地方南部を中心に分布する。



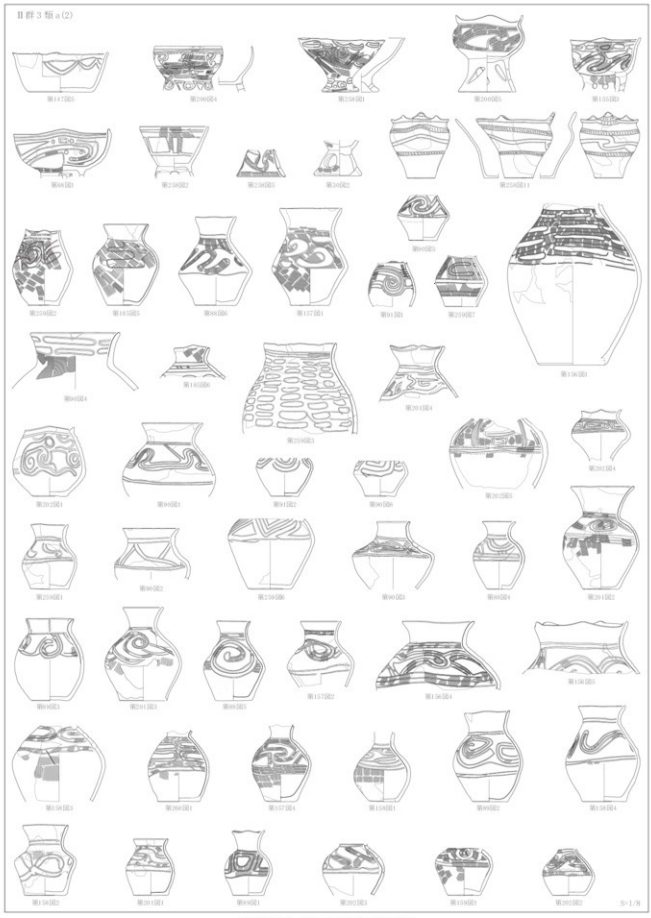
第 364 図　縄文土器分布図



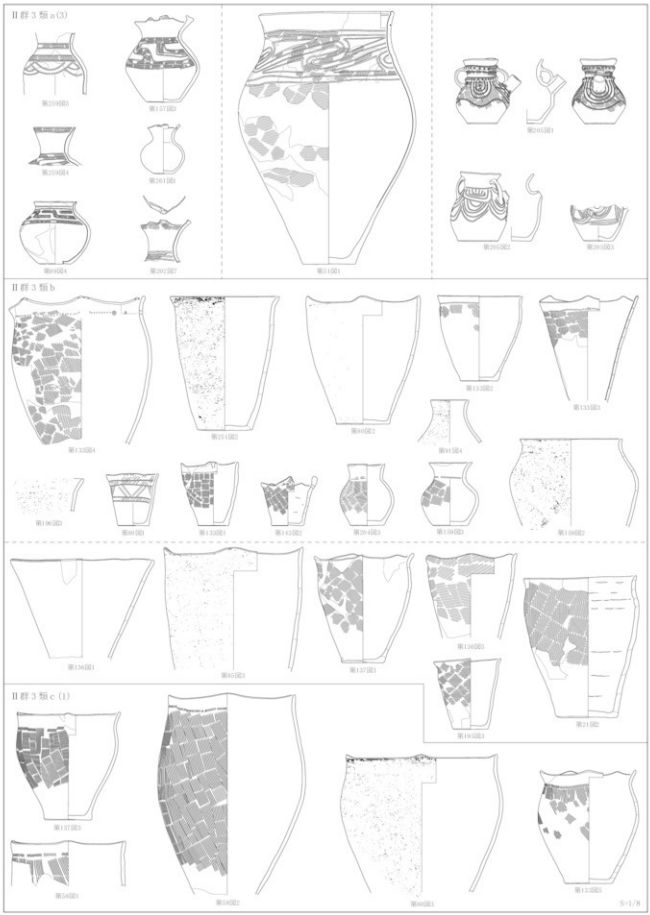
第 365 図　縄文土器集成図（1）



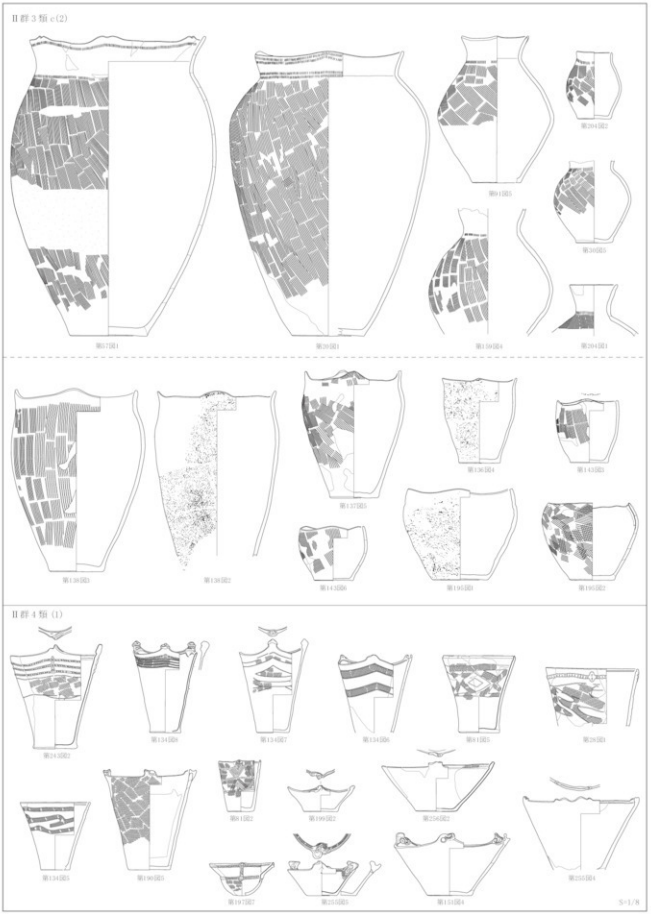
第366図　縄文土器集成図（2）



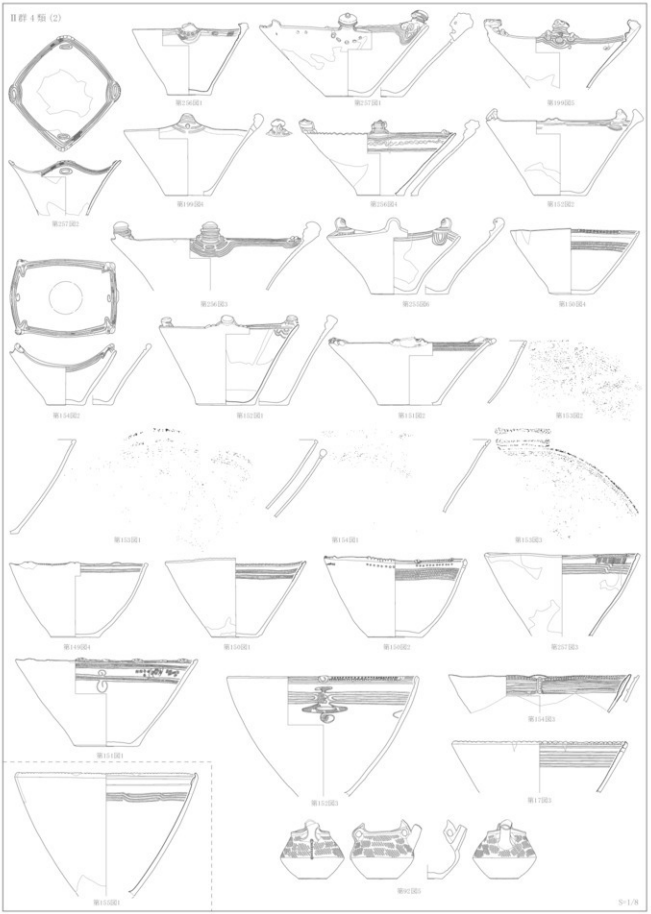
第367図　縄文土器集成図（3）



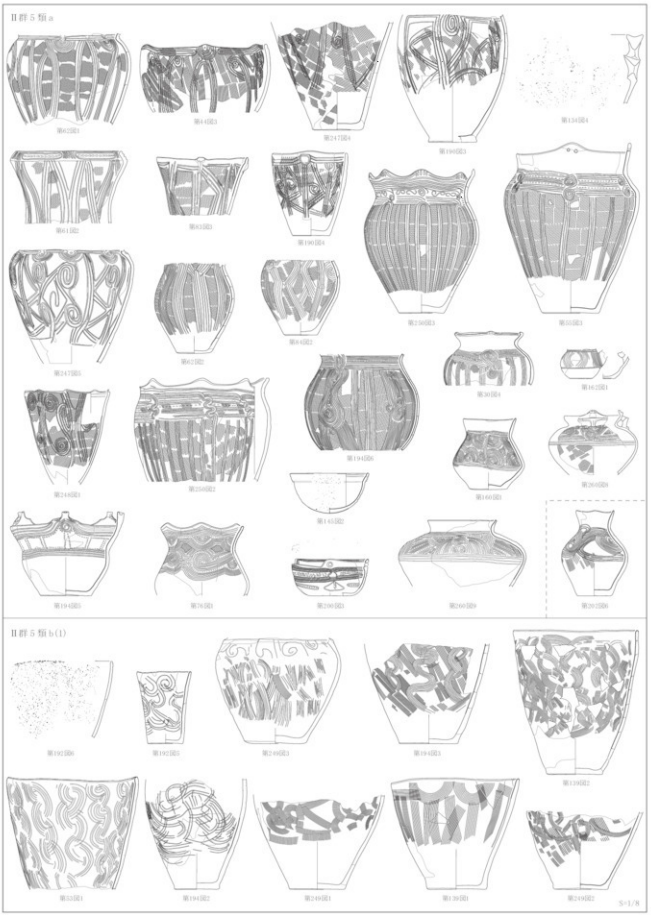
第368図　縄文土器集成図（4）



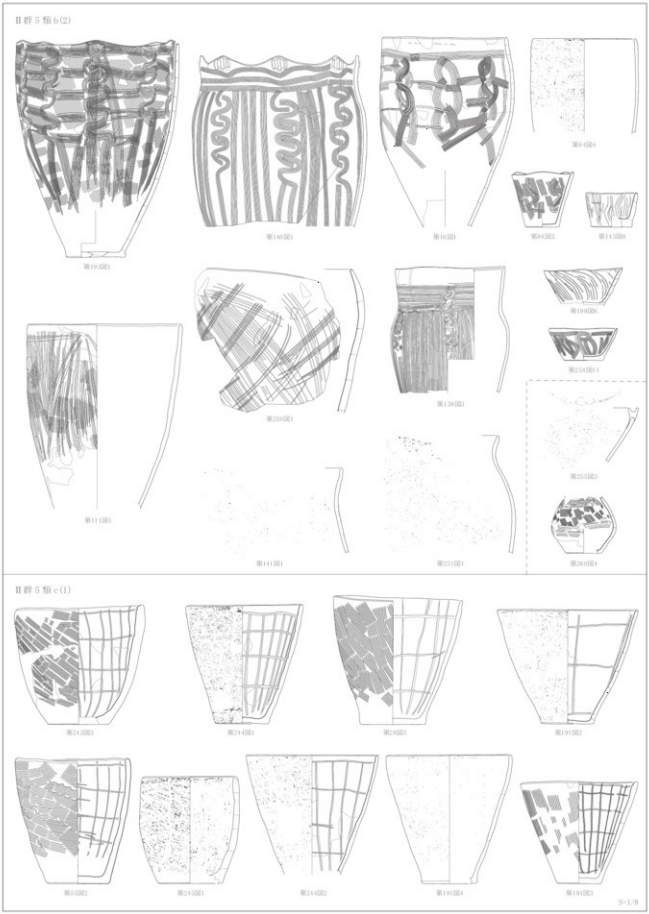
第369図　縄文土器集成図（5）



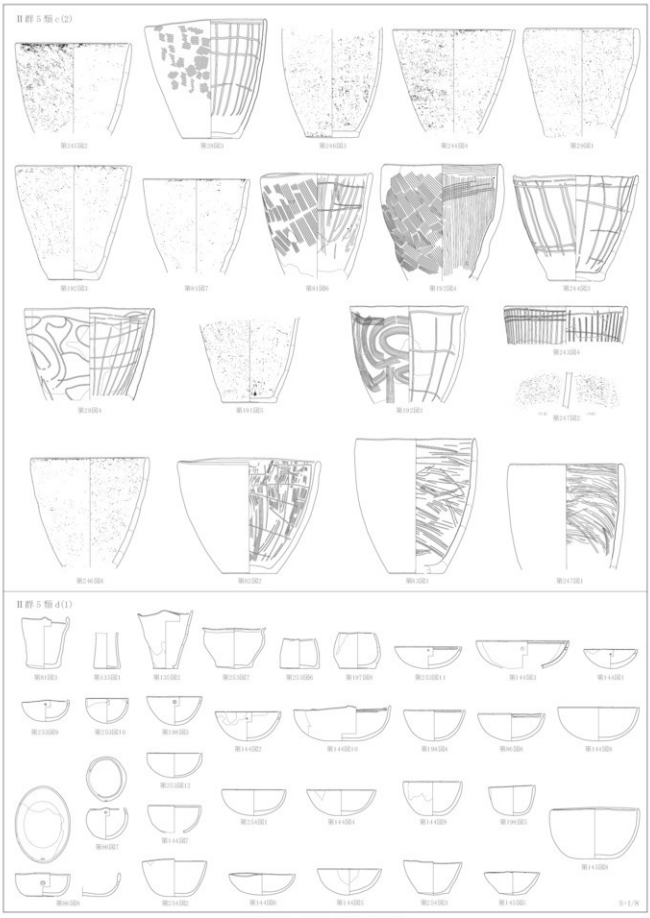
第370図　縄文土器集成図（6）



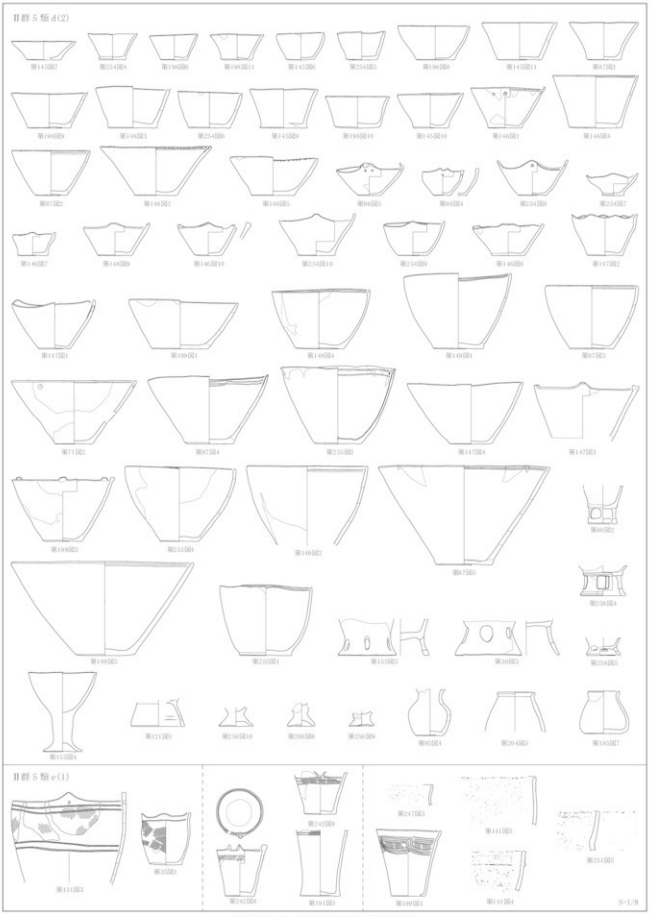
第 371 図　縄文土器集成図（7）



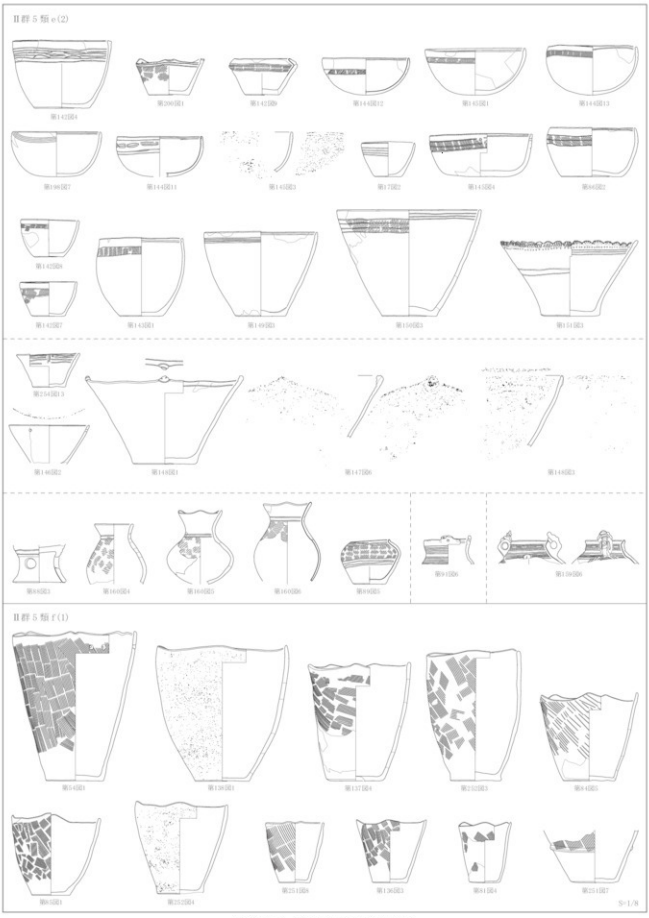
第372図　縄文土器集成図（8）



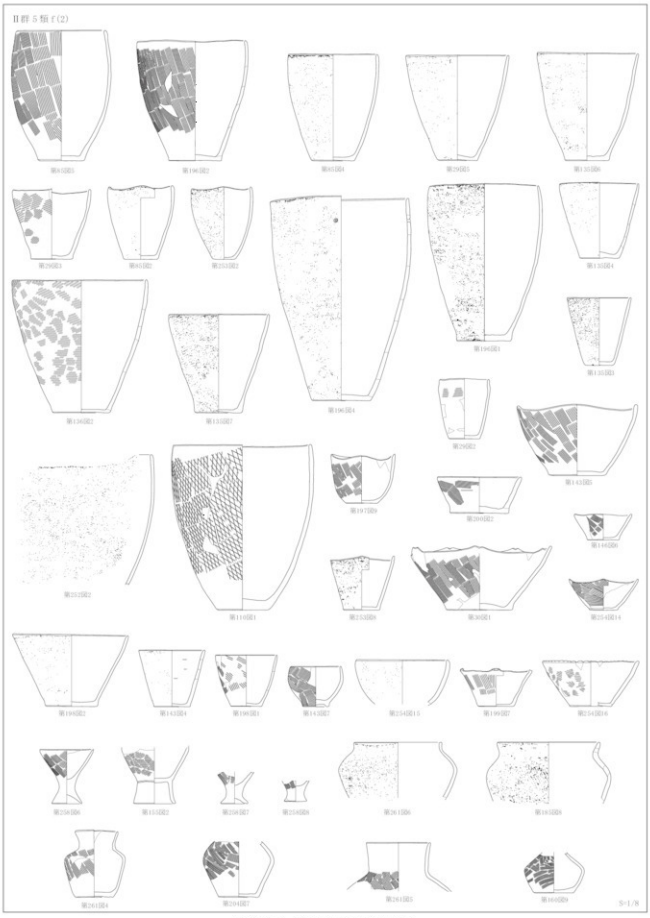
第373図　縄文土器集成図（9）



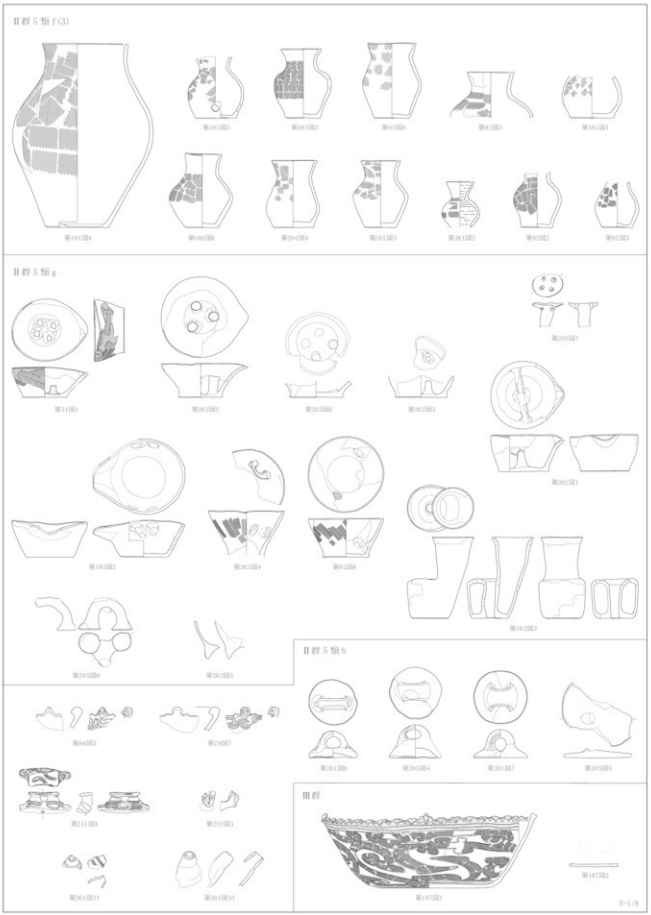
第 374 図　縄文土器集成図（10）



第 375 図　縄文土器集成図（11）

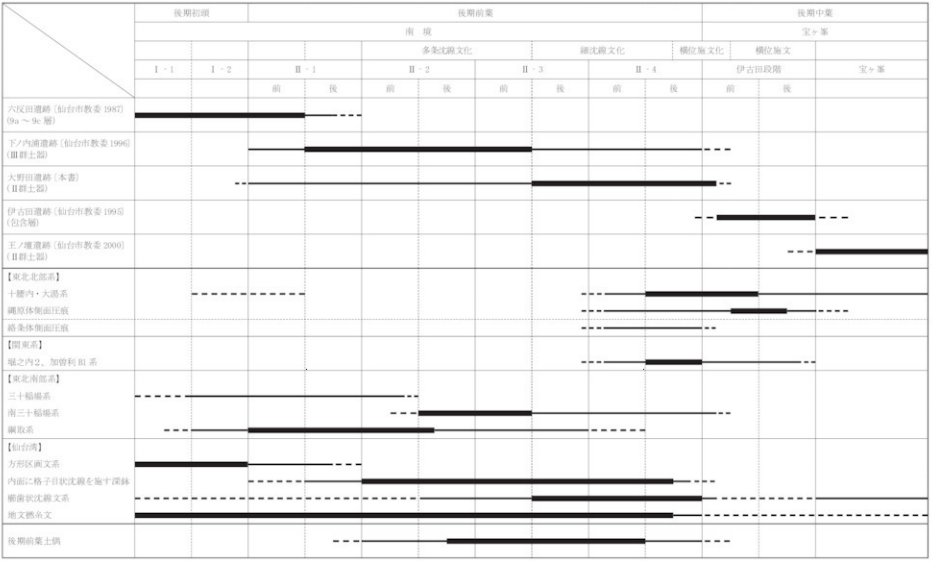


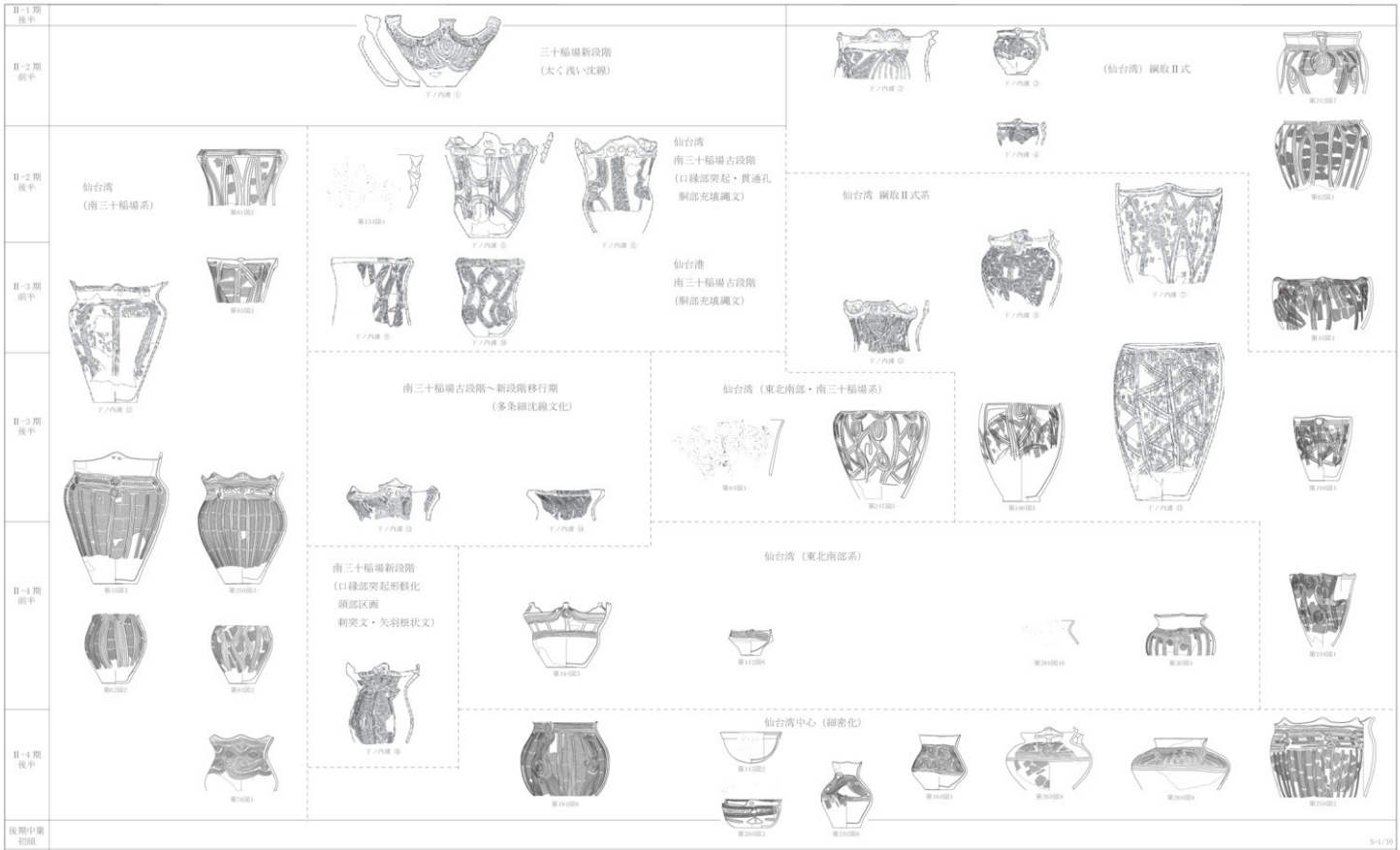
第 376 図　縄文土器集成図（12）



第377図　縄文土器集成図（13）

第 12 表　仙台湾（名取川下流域）の縄文時代後期前半を中心とする土器変遷





下ノ内浦遺跡〔1996〕出土土器 ① 206 頁-1 ② 285 頁-2 ③ 369 頁-3 ④ 177 頁-2 ⑤ 254 頁-1 ⑥ 294 頁-1 ⑦ 292 頁-1 ⑧ 260 頁-1 ⑨ 249 頁-3 ⑩ 373 頁-1 ⑪ 294 頁-3 ⑫ 255 頁-1 ⑬ 260 頁-4 ⑭ 256 頁-9 ⑮ 203 頁-1 ⑯ 206 頁-2

第 378 図 仙台湾 下ノ内浦遺跡〔1996〕・大野田遺跡 多条沈線文土器 変遷試案

下ノ内浦遺跡〔1996〕 ① 213 頁-2 ② 264 頁-2 ③ 264 頁-3 ④ 265 頁-2 ⑤ 213 頁-1

第 379 図　仙台湾　下ノ内浦遺跡〔1996〕・大野田遺跡　櫛歯状沈線文土器　変遷試案

第 380 図　内面に格子目状沈線を施す深鉢　変遷試案

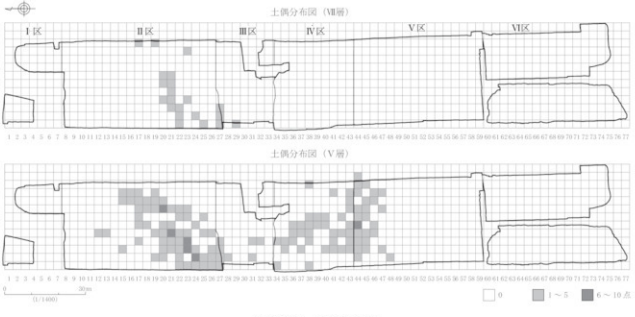
第 381 図　大野田遺跡出土の異系統土器を中心とする変遷試案

2）土　偶

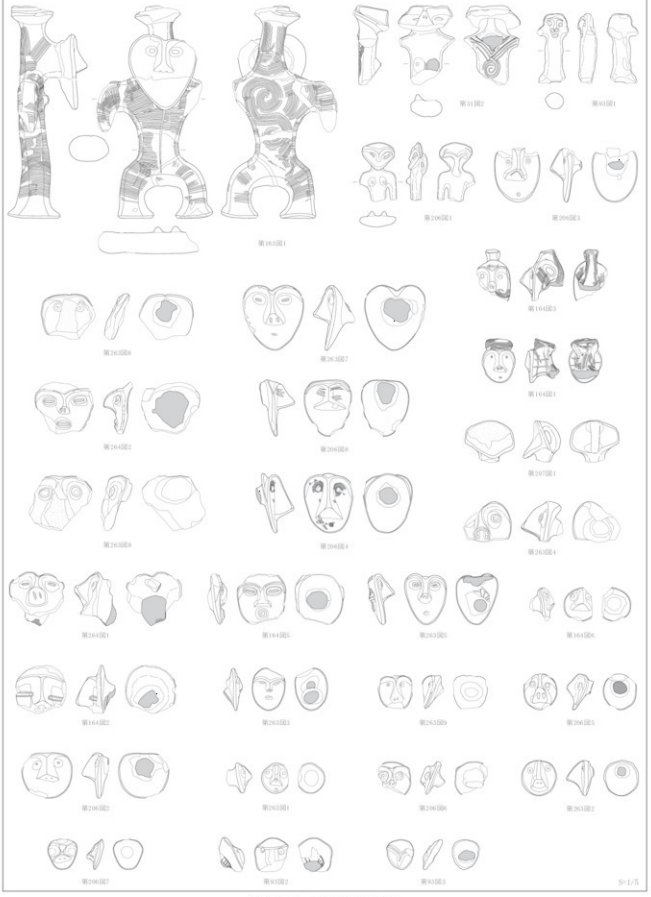
本遺跡出土の土偶はいずれも中実、脚部が短く広がり安定し自立することができるものが多い。文様は櫛歯状沈線や細めの多条沈線で渦巻文やS字文を施文するものが主体である。これは本遺跡出土の土器群の文様と一致する。これらの要素は頭部（顔面）も含めていわゆるハート形土偶と一致する部分でもある。腕部は直角に曲がるものには、短いものと端部を丸く収めるものがある。腕部の形状は脚部に比べて統一性はあまり感じられない。脚部の断面形は楕円形を呈するものが多く東北北部に近い。胴部は細いものが多く正中線のあるものはすべて沈線で表現され腹部が膨らむものはほとんどない。本遺跡で特徴的なものは後頭部に相当する部分が長く伸び頂部に隆線で渦巻文が施文される。結髪あるいは被り物であろうか。後頭部に橋状の把手が付くものもある。大形のものは30cm前後である。主に中・小形のものには製作時に粘土を巻きつける軸棒の痕跡が見られるものがある。中・大形のものには胴部上・下に凹状、凸状の接合痕跡が明瞭なものが存在する。胎土は通常の土器と差はない。下ノ内浦遺跡〔1996〕では20点ほど出土し、文様は比較的太い沈線文が多い。伊古田遺跡〔1995〕では胴部が長く、腕部は直角に曲がり、大形のものは40cmを超え、自立することが難しい。また座位の土偶が出現する。文様は刺突文が多い。本遺跡出土の土偶は頭部の形状など伊古田遺跡〔1995〕の土偶に引き継がれていく部分も多い。

本遺跡の土偶は文様から東北地方南部の土器と連動する。この様な文様構成をとる土偶の分布は東北地方南部のほか堀之内1式圏内の北関東を中心とする関東地方や長野県北東部・新潟県南西部まで及ぶ。長野県北東部は堀之内1式、信州系小仙塚類型の中心地とされ新潟県南西部の初期の南三十稲場式に影響を及ぼしたとされる。土偶は文様を施文する部分が限られるなど、土器文様と同一歩調をとるとは限らないが、概ね南境Ⅱ-3期を中心とする時期と考えられる。仙台湾に見られる後期前葉土偶の出現時期は南境Ⅱ-2期前半頃と思われる。沈線文は後半になるほど福島県浜・中通りや関東北東部のハート形土偶に比べてより細沈線化（櫛歯状化）傾向にあると思われる。

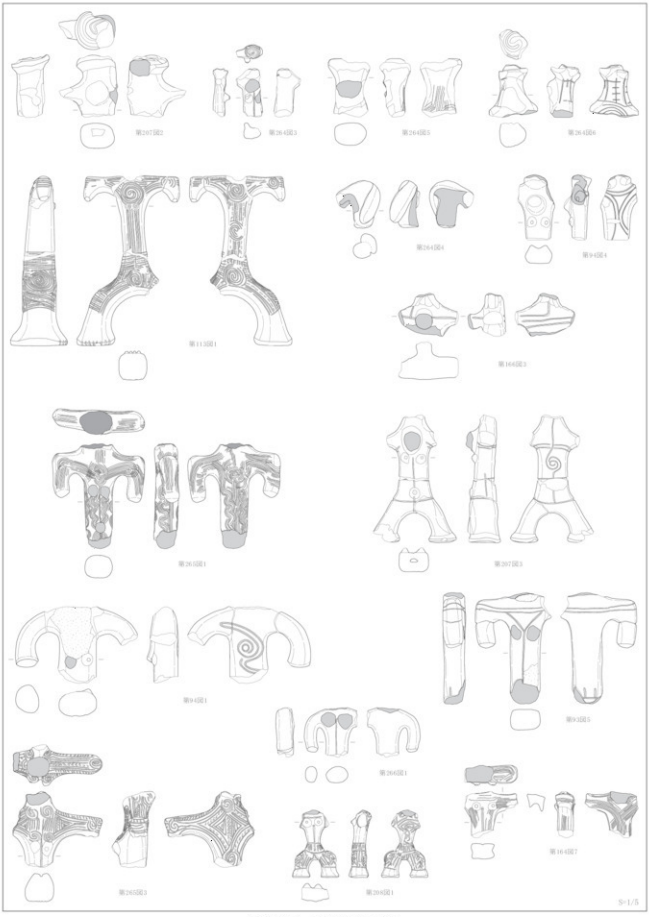
掲載土偶111点。頭部29点、腕部6点、胴部29点、脚部14点、脚部？1点、頭部から胴部4点、腕部から胴部13点、胴部から脚部11点、頭部から胴部・腕部2点、胴部から腕部・脚部1点、左腕部と顎部を除きほぼ完形1点、他アスファルト接着痕7点。その他未掲載土偶は可能性の高いものを含めて221点。未掲載土偶はそのほとんどが小破片である。全332点の残存部位は頭部・頭部？58点、胴部・胴部？63点、腕部・腕部？66点、脚部・脚部？110点、頭部から胴部4点、胴部から腕部14点、胴部から脚部13点、3か所以上残存4点、他アスファルト接着痕14点。その他土偶の可能性のある一次選別の資料には粗いユビナデ整形のみの特殊土器の破片（内面底面などに付く突起や横位に懸架する棒状のもの）と思われる資料が30点ほどある。



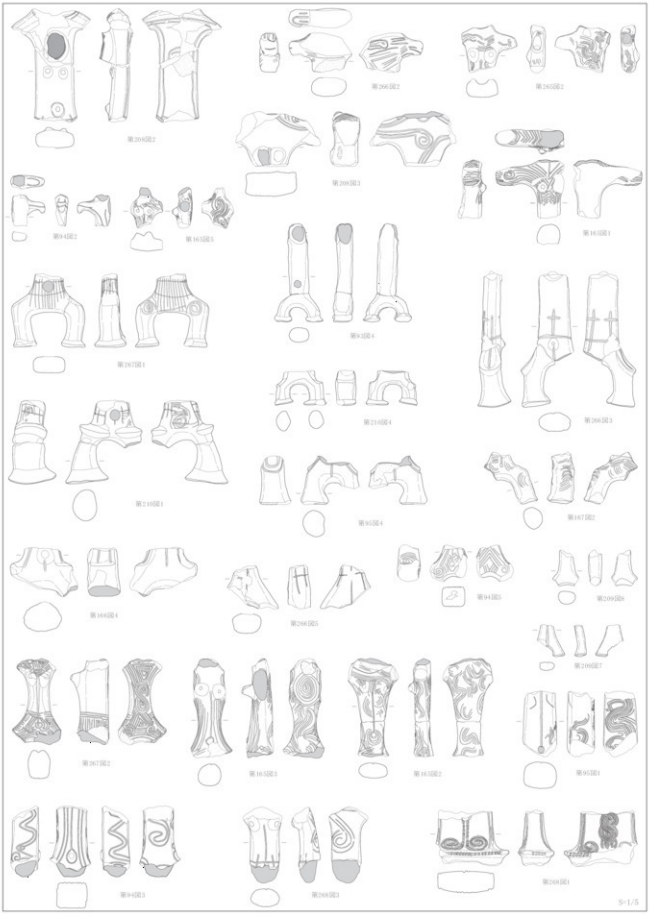
第382図　土偶分布図



第 383 図　土偶集成図（1）

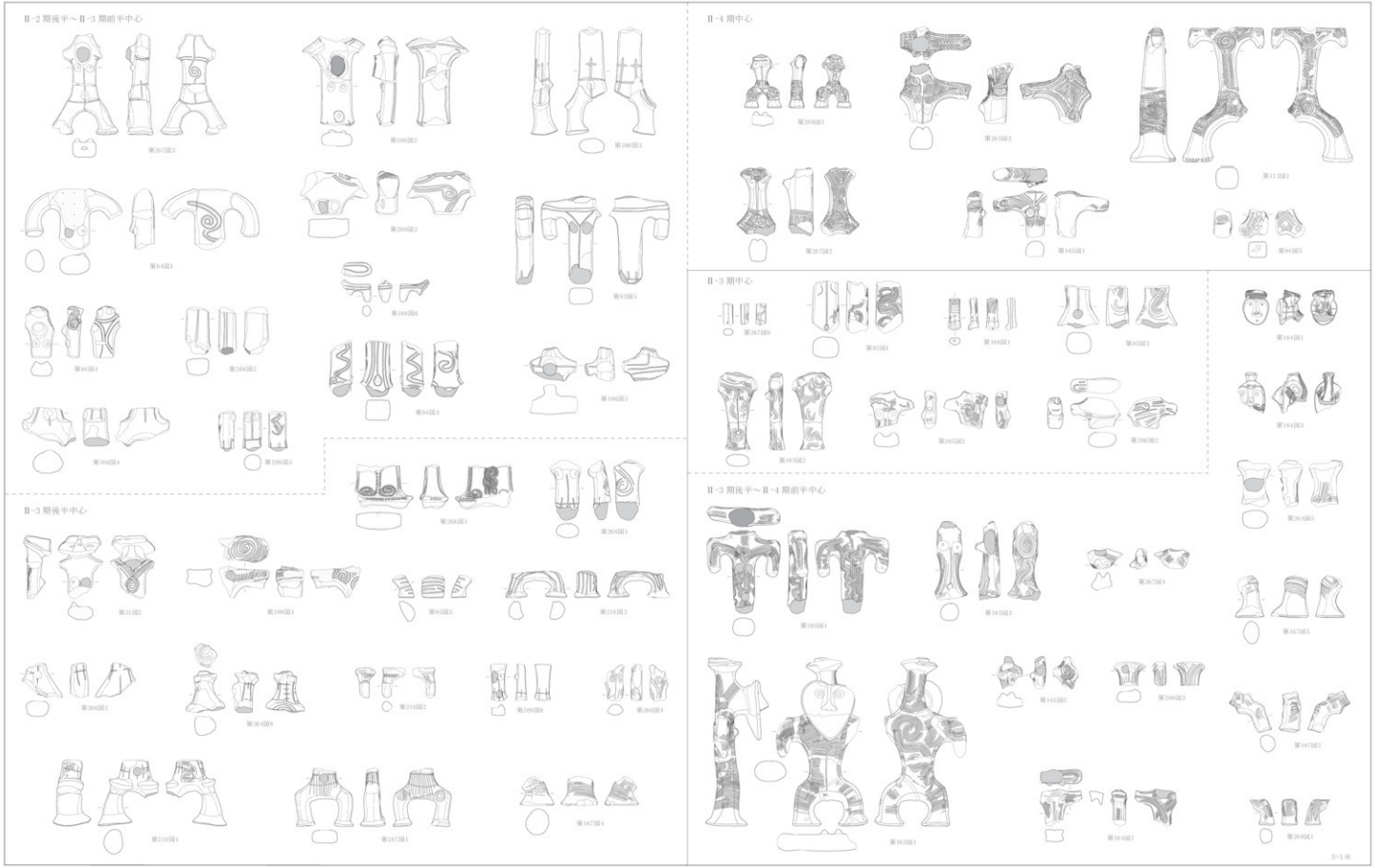


第 384 図　土偶集成図（2）



第 385 図　土偶集成図（3）

第 386 図　土偶集成図（4）



第387図　文様から見た土偶　変遷試案

3）土製円盤

土製円盤は全部で7,186点出土している。Ⅴ層からの出土が圧倒的に多いが、Ⅶ層からも少量出土している。Ⅰ層やⅢ層からも出土しているが、いずれも遺構の掘削などを要因とした下層からの混入とみられることから、本来、これらはⅤ層に帰属するものと考えられる。各層ともⅡ区からⅤ区にかけて出土が確認されており、調査区南北端のⅠ区とⅥ区では出土していない。

Ⅴ層からは5,151点出土している。これを地区別にみると、Ⅱ区がもっとも多く、次いでⅣ区、Ⅴ区、Ⅲ区の順となる。遺物包含層（基本層序Ⅴ層）からは1,788点出土しているが、このうち1,533点はⅡ区から出土したものである。遺構からは2,383点出土している。SR201で1,694点、SR501で591点と一部の遺構で多量の出土がみられるが、そのほかの遺構ではわずかに散見される程度である。

Ⅶ層からは683点出土している。地区別にみた出土量では、Ⅱ区がもっとも多く、次いでⅣ区、Ⅲ区、Ⅴ区の順となる。遺構からは101点出土しているが、いずれも数点程度であり、特定の遺構に集中する傾向はみられない。

土製円盤は、孔の有無や孔の貫通・非貫通の違いでａ～ｃ類の3類に大別した。ａ類は孔が開いていないもの、ｂ類は孔が開いているもの、ｃ類は非貫通の孔が穿たれているものである。

ａ類は6,982点（全体の97.2%）、ｂ類は150点（2.1%）、ｃ類は54点（0.7%）出土しており、このうち146点を図示した。

ａ～ｃ類は、孔の違いだけで、大きさも平面形態の種類もほぼ同じである。平面形態では、多角形を呈するものがもっとも多く4,902点（全体の91.2%）、円形が263点（4.9%）、不定形が66点（1.2%）、楕円形が65点（1.2%）、正方形が50点（0.9%）、三角形が28点（0.5%）、長方形が3点（0.1%）出土している。

このうち不定形については、孔のないａ類では通常の土器片との識別がつかないため抽出しなかったが、ｂ・ｃ類では全体に占める不定形の比率は高い。ｂ類では40.3%、ｃ類では40.9%が不定形である。今後、検討できる資料の増加を待たねばならないが、該当する遺物として抽出できないだけで、本来はａ類にも不定形がともなっている可能性が考えられる。

土製円盤の具体的な用途については不明であるが、基本的にａ類があり、必要に応じてａ類を穿孔してｂ類を作出しているものと想定される。ｃ類については、数は少ないが貫通孔と非貫通孔が混在する個体があることから、ｂ類の未製品である可能性が高い。

第13表　土製円盤の平面形態別一覧表

分類 ＼ 平面形態	A 円　形	B 楕円形	C 正方形	D 長方形	E 多角形	F 三角形	G 不定形	合　計
a　類	247	64	45	0	4,838	18	－	5,212
b　類	6	1	3	2	50	9	48	119
c　類	9	0	2	1	13	1	18	44
合　計	263	65	50	3	4,902	28	66	5,375
比　率	4.9%	1.2%	0.9%	0.1%	91.2%	0.5%	1.2%	100.0%

第14表　土製円盤ｂ・ｃ類の穿孔箇所別一覧表

分類 ＼ 穿孔箇所	1 中　央	2 中央から ずれる	3 端　部	合　計
b　類	70	39	10	119
b類での比率	58.8%	32.8%	8.4%	100.0%
c　類	21	22	1	44
c類での比率	47.7%	50.0%	2.3%	100.0%

第15表　土製円盤ｃ類の穿孔面別一覧表

分類 ＼ 穿孔面	f 外　面	b 内　面	bf 内外面	合　計
c　類	30	5	9	44
比　率	68.2%	11.4%	20.4%	100.0%

第16表　土製円盤の地区別一覧表

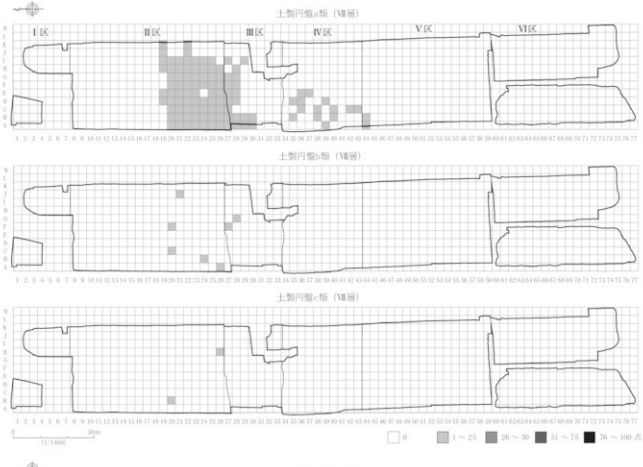
層位 ＼ 地区	Ⅰ　区	Ⅱ　区	Ⅲ　区	Ⅳ　区	Ⅴ　区	Ⅵ　区	不　明	合　計
Ⅰ　層	0	55	0	7	2	0	15	79
Ⅲ　層	0	162	16	278	13	0	300	769
Ⅴ　層	0	3,656	39	785	556	0	115	5,151
Ⅶ　層	0	602	22	49	2	0	8	683
不　明	0	313	23	62	28	0	78	504
合　計	0	4,788	100	1,181	601	0	516	7,186
比　率	0.0%	66.6%	1.4%	16.4%	8.4%	0.0%	7.2%	100.0%

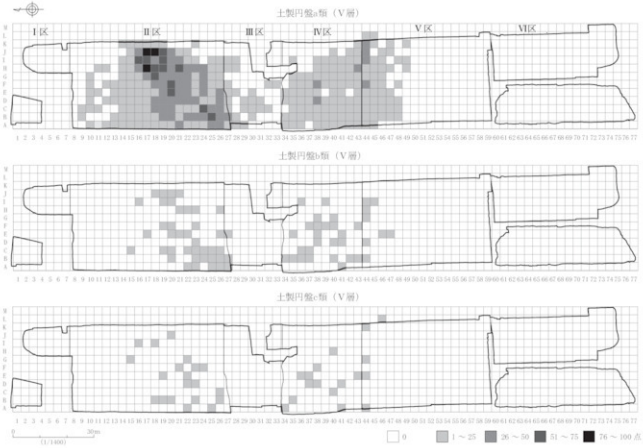
第 17 表　土製円盤の分類別一覧表

分類 ＼ 層位	Ⅰ層	Ⅲ層	Ⅴ層	Ⅶ層	不明	合　計	分類 ＼ 層位	Ⅰ層	Ⅲ層	Ⅴ層	Ⅶ層	不明	合　計
a-A	6	50	164	12	15	247	c-B3b						0
a-B	2	7	44	6	5	64	c-B3f						0
a-C		4	36	3	2	45	c-B3bf						0
a-D						0	c-C1b						0
a-E	56	429	3,523	498	332	4,838	c-C1f		1				1
a-F			14	1	3	18	c-C1bf						0
a-G						0	c-C2b						0
a-欠損	14	272	1,204	152	128	1,770	c-C2f						0
合　計	78	762	4,985	672	485	6,982	c-C2bf			1			1
a 類の比率						97.2%	c-C3b						0
b-A1			5			5	c-C3f						0
b-A2			1			1	c-C3bf						0
b-A3						0	c-D1b						0
b-B1			1			1	c-D1f						0
b-B2						0	c-D1bf						0
b-B3						0	c-D2b						0
b-C1			2			2	c-D2f			1			1
b-C2					1	1	c-D2bf						0
b-C3						0	c-D3b						0
b-D1		1				1	c-D3f						0
b-D2						0	c-D3bf						0
b-D3			1			1	c-E1b						0
b-E1		3	22	1	3	29	c-E1f			4		1	5
b-E2	1		15	2	1	19	c-E1bf						0
b-E3			2			2	c-E2b			1			1
b-F1			4	1		5	c-E2f			4			4
b-F2			2	1		3	c-E2bf			2			2
b-F2・c-F1f			1			1	c-E3b						0
b-F3						0	c-E3f			1			1
b-G1			23		4	27	c-E3bf						0
b-G2		1	10	1	1	13	c-F1b						0
b-G2・c-G2b			1			1	c-F1f						0
b-G3			5	2		7	c-F1bf						0
b-欠損		1	23		7	31	c-F2b						0
合　計	1	6	118	8	17	150	c-F2f				1		1
b 類の比率						2.1%	c-F2bf						0
c-A1b			1			1	c-F3b						0
c-A1f			4	1		5	c-F3f						0
c-A1bf						0	c-F3bf						0
c-A2b					1	1	c-G1b						0
c-A2f			1			1	c-G1f			6	1		7
c-A2bf			1			1	c-G1bf			2			2
c-A3b						0	c-G2b			2			2
c-A3f						0	c-G2f			4			4
c-A3bf						0	c-G2bf			3			3
c-B1b						0	c-G3b						0
c-B1f						0	c-G3f						0
c-B1bf						0	c-G3bf						0
c-B2b						0	c-欠損			10			10
c-B2f						0	合　計	0	1	48	3	2	54
c-B2bf						0	c 類の比率						0.7%
総合計								79	769	5,151	683	504	7,186

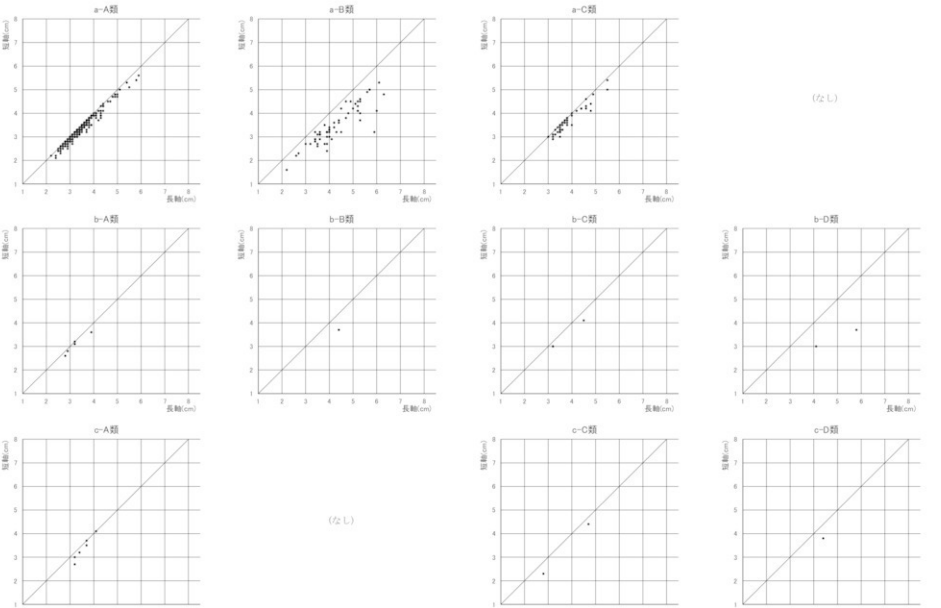
第 18 表　土製円盤が出土したⅤ・Ⅶ層の主な遺構一覧表（出土量順）

点数 ＼ Ⅴ層	SR201	SR501	401 配石	SR301	404 配石	SR502	SK4122	SK214	包含層（Ⅱ区）	包含層（Ⅳ区）	包含層（Ⅲ区）	合　計
出土点数	1,694	591	31	21	14	13	4	3	1,533	203	11	4,118
Ⅴ層での比率	32.9%	11.5%	0.6%	0.4%	0.3%	0.3%	0.1%	0.1%	29.8%	3.9%	0.2%	80.1%
点数 ＼ Ⅶ層	SK297	208 配石	211 配石	SK251	SK230	SK248	SK264	SK282	SK287	203 配石	SK218	合　計
出土点数	8	5	5	5	4	4	3	3	3	2	2	44
Ⅶ層での比率	1.2%	0.7%	0.7%	0.7%	0.6%	0.6%	0.4%	0.4%	0.4%	0.3%	0.3%	6.3%

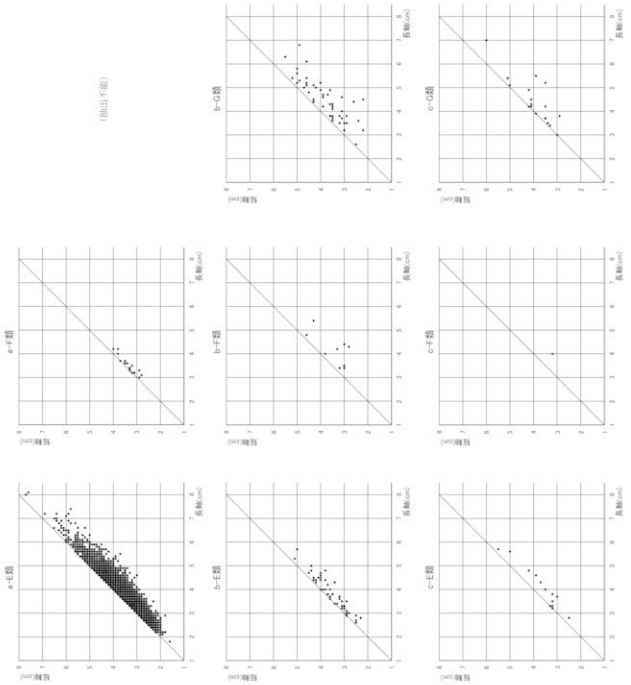




第 388 図　土製円盤分布図



第 389 図　土製円盤の分類別長・短軸規模分布図 (1)



第 390 図　土製円盤の分類別長・短軸規模分布図（2）

4）土　　錘

土錘は全部で 109 点出土している。Ⅴ層からの出土がもっとも多く 71 点、Ⅶ層から 12 点、Ⅲ層から 11 点、層不明 15 点である。このうち 72 点を図示した。

土錘は、形態や素材の違いで、有溝土錘（A ～ S 類）、管状土錘（T ～ V 類）、その他土錘（W・X 類）、土器片錘の 4 類に大別した。もっとも出土量が多いのは有溝土錘の 76 点で全体の 69.7%を占める。このうち、無孔は 42 点（59.2%）、有孔は 29 点（40.8%）である。

5）その他の土製品

以下、腕輪形土製品・耳飾り・ミニチュア・その他土製品（動物・土笛・鐸・スプーン・舟形土製品）の出土分布図を提示する。

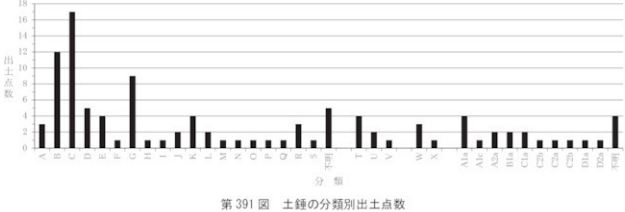
第 19 表　土錘の地区別一覧表

層位	分類	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅳ区	Ⅴ区	Ⅵ区	不明	合計
Ⅲ層	有溝土錘		2		5				7
	管状土錘				1				1
	その他土錘				1				1
	土器片錘		2						2
	合計	0	4	0	7	0	0	0	11
Ⅴ層	有溝土錘		25	3	12	8			48
	管状土錘		4						4
	その他土錘				2	1			3
	土器片錘		13	1	1	1			16
	合計	0	42	4	15	10	0	0	71
Ⅶ層	有溝土錘		8		2				10
	管状土錘				1				1
	その他土錘								0
	土器片錘		1						1
	合計	0	9	0	3	0	0	0	12
不明	有溝土錘		6	1	3	1			11
	管状土錘		1						1
	その他土錘								0
	土器片錘	1	2						3
	合計	1	9	1	3	1	0	0	15
総合計		1	64	5	28	11	0	0	109
比率（%）		0.9%	58.7%	4.6%	25.7%	10.1%	0.0%	0.0%	100.0%

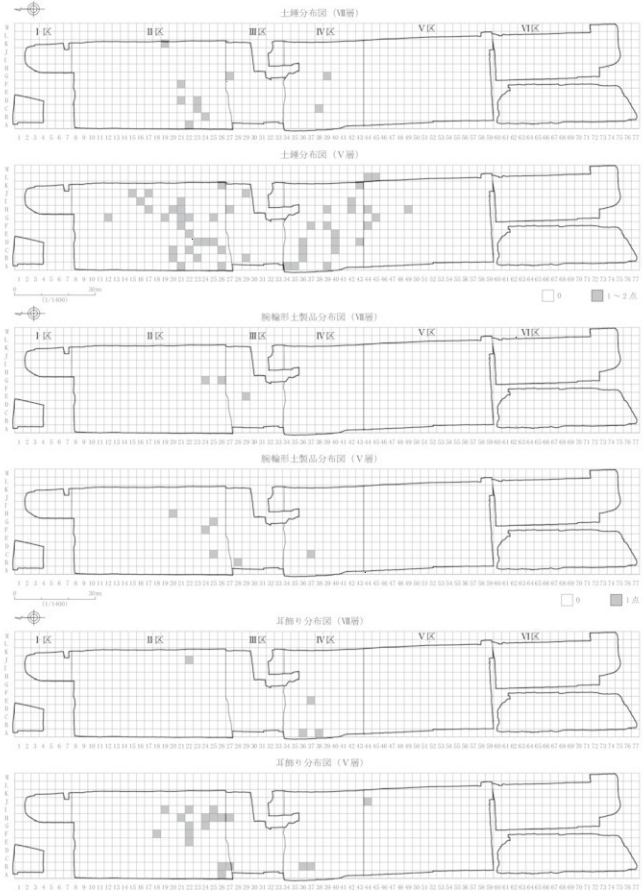
第 20 表　土錘の分類別一覧表

分類＼層位			Ⅲ層	Ⅴ層	Ⅶ層	不明	合計
有溝土錘	無孔	A		3		1	4
		B		5	4	3	12
		C	2	11	2	2	17
		D	1	3	1		5
		E		3		1	4
	有孔	F				1	1
		G	2	4	1	2	9
		H		1			1
		I		1			1
		J		2			2
		K		4			4
		L		2			2
		M				1	1
		N	1				1
		O		1			1
		P		1			1
		Q		1			1
		R		3			3
		S		1			1
	不明	不明	1	2	2		5
合計			7	48	10	11	76
有溝土錘の比率							69.7%
総合計							

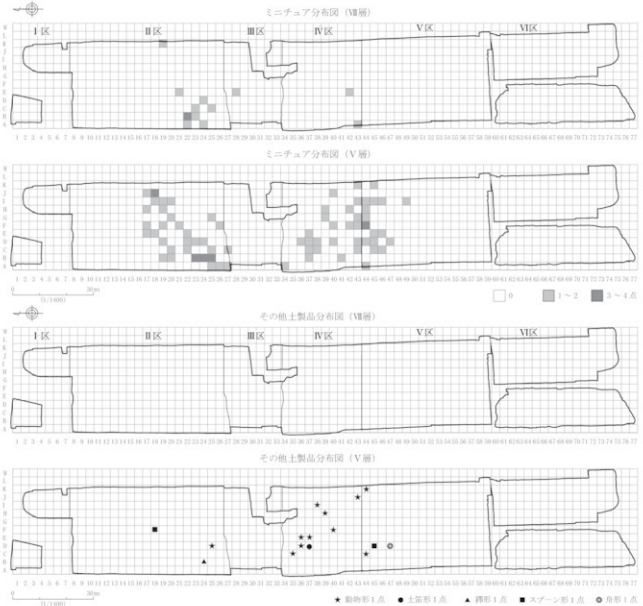
分類＼層位			Ⅲ層	Ⅴ層	Ⅶ層	不明	合計
管状土錘		T		4			4
		U	1		1		2
		V				1	1
合計			1	4	1	1	7
管状土錘の比率							6.4%
その他土錘		W	1	2			3
		X		1			1
合計			1	3	0	0	4
その他土錘の比率							3.7%
土器片錘	A1a			4			4
	A1c			1			1
	A2a			2		1	3
	B1a			1	1	1	3
	C1a		1	1			2
	C1b					1	1
	C2a			1			1
	C2b			1			1
	D1a		1				1
	D2a			1			1
	不明			4			4
合計			2	16	1	3	22
土器片錘の比率							20.2%
			11	71	12	15	109



第 391 図　土錘の分類別出土点数



第 392 図　土製品分布図 (1)



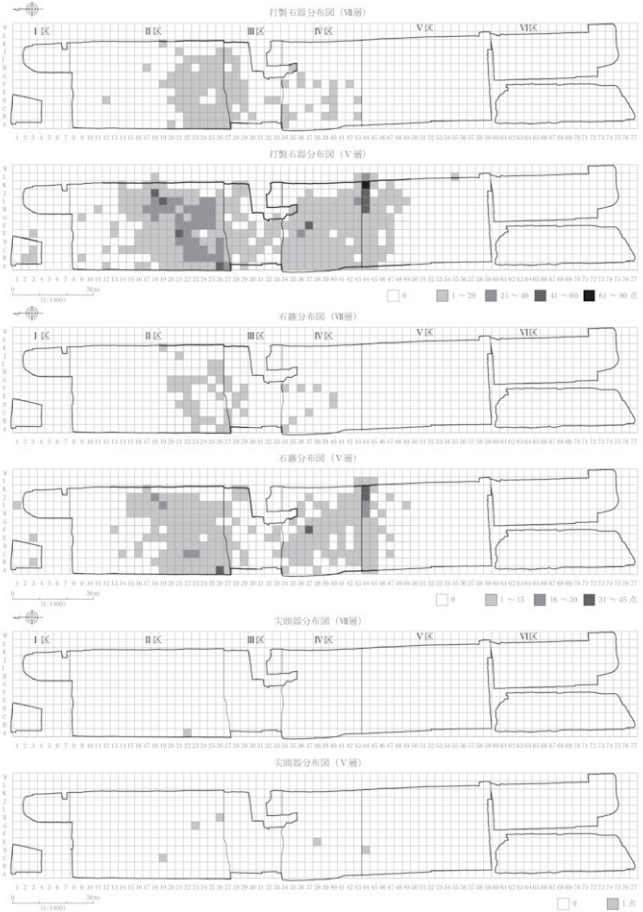
第 393 図　土製品分布図（2）

6）打製石器

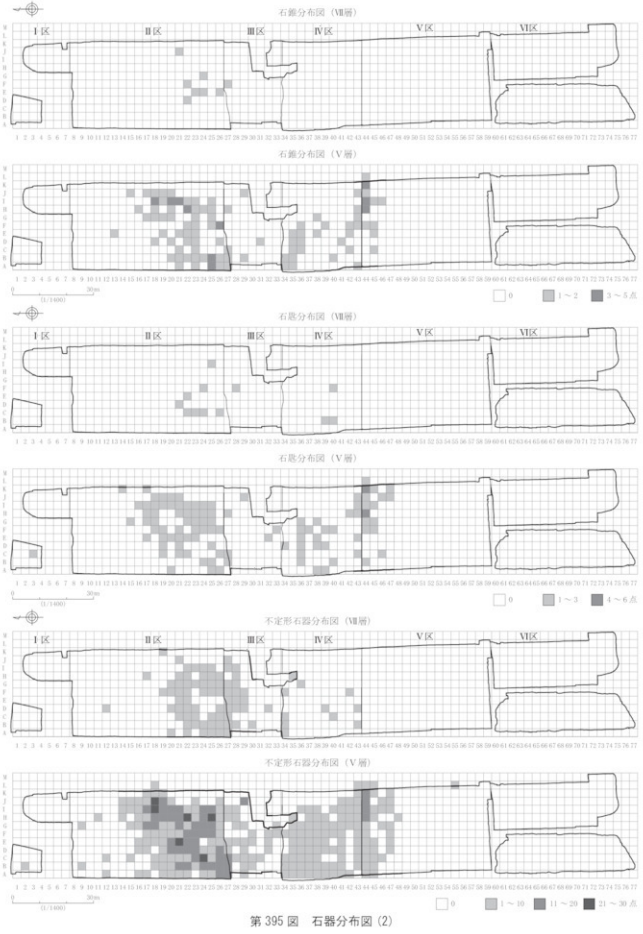
打製石器に関しては膨大な資料の中から 4,673 点のみ抽出したに過ぎず、器種別石材別組成表（第 21 表）や、石器分布図（第 394 ～第 397 図）に示した点数は、本遺跡の石器群の特色を全体的に反映しているわけではない。多量にあるはずの剥片・石核はほんの一部のみの抽出に留まっている。しかし、二次加工のある石器については、数多く抽出されており、概ね、器種ごとの組成比を反映していると判断される。器種ごとの分布上の偏在性は認められない。石材別に見ると石鏃の玉髄・鉄石英素材の割合が高い。一方、石匙・不定形石器にこれらの石材が使用されることは例外的である。したがって、用いられている玉髄や鉄石英の原石は小型のものであったと考えられる。器種別組成をみると 4,673 点中 1,582 点（34%）が石鏃関連資料であり、比率が高い。そのなかで未製品・失敗品としたものが 641 点、円基状としたもの 118 点、合わせて 759 点（48%）が本来の石鏃の規格から外れた資料である。未製品等の比率が高いことは、本遺跡内で石器制作が行われていたことを示している。また、不定形石器（スクレイパー類）の出土量の多さも本遺跡の特徴である。石器使用痕の観察が必要であるが、不定形石器を用いた何らかの作業、たとえば動物の解体なども行われていたと推定される。

第21表　打製石器の器種別石材組成一覧表

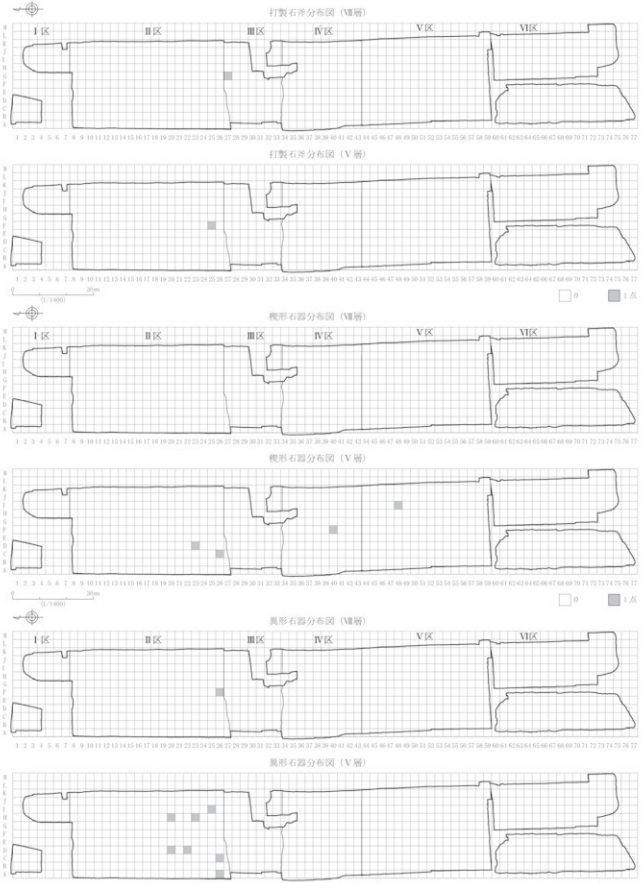
器種	分類	細分	石材 黒曜石	珪質頁岩	流紋岩	珪質凝灰岩	緑色凝灰岩	鉄石英	玉髄	その他	合計		
石鏃	有基	Ka-a1-1	2	114	53	9	0	51	48	0	277	567	1,582
		Ka-a1-2	1	76	52	5	0	30	30	0	194		
		Ka-a1-3	2	5	1	3	0	5	3	0	19		
		Ka-a1-4	0	1	1	0	0	2	1	0	5		
		Ka-a1-5	0	8	4	0	0	9	1	0	22		
		Ka-a1-6	0	12	11	2	0	5	4	0	34		
		Ka-a1-7	0	6	2	0	0	3	1	0	12		
		Ka-a1-8	0	1	0	1	0	1	1	0	4		
	平基	Ka-a2	1	5	4	0	0	6	0	0	16	16	
	凹基	Ka-a3-1	6	27	9	1	0	15	6	0	64	186	
		Ka-a3-2-1	1	26	7	1	0	25	7	0	67		
		Ka-a3-2-2	0	30	9	0	0	13	3	0	55		
	円基状	Ka-a4	1	41	20	4	1	35	16	0	118	118	
	未製品・失敗品	Ka-a5	8	286	68	18	2	157	102	0	641	641	
	欠損分類不可	Ka-a6	3	15	17	2	0	5	12	0	54	54	
尖頭器	有茎	Ka-b1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	9
	無茎	Ka-b2	0	7	1	1	0	0	0	0	9		
	欠損分類不可	Ka-b3	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
石錐	棒状	Ka-c1	0	14	2	0	0	0	0	0	16	16	198
	つまみ付き	Ka-c2-1	0	21	1	0	0	0	0	0	22	168	
		Ka-c2-2	0	14	0	0	0	0	0	0	14		
		Ka-c2-3	0	43	3	1	0	3	1	0	51		
		Ka-c2-4	0	53	11	2	0	11	4	0	81		
	欠損分類不可	Ka-c3	0	11	2	0	0	0	1	0	14	14	
石匙	縦型	Ka-d1-1	0	26	1	0	0	2	1	0	30	139	227
		Ka-d1-2	0	47	3	1	0	0	2	0	53		
		Ka-d1-3	0	17	2	0	0	0	0	0	19		
		Ka-d1-4	0	8	0	0	0	0	0	0	8		
		Ka-d1-5	0	7	0	0	0	0	0	0	7		
		Ka-d1-6	0	10	1	0	0	0	0	0	10		
		Ka-d1-7	1	4	0	0	0	1	0	0	6		
		Ka-d1-8	0	5	0	0	0	0	0	0	5		
	横型	Ka-d2-1	0	16	1	0	0	0	0	0	17	53	
		Ka-d2-2	0	9	1	0	0	0	0	0	10		
		Ka-d2-3	0	5	0	0	0	0	0	0	6		
		Ka-d2-4	0	16	2	0	0	0	0	0	18		
		Ka-d2-5	0	0	1	0	0	0	0	0	1		
		Ka-d2-6	0	2	0	0	0	0	0	0	2		
	欠損分類不可	Ka-d3	0	30	3	0	0	2	0	0	35	35	
不定形石器	縦長剥片素材	Ka-e1-1	1	156	23	3	0	8	4	1	195	815	2,333
		Ka-e1-2	0	136	12	3	0	3	3	0	157		
		Ka-e1-3	0	33	2	1	0	1	0	0	37		
		Ka-e1-4	0	41	5	3	1	1	0	0	51		
		Ka-e1-5	1	80	7	3	0	6	1	0	98		
		Ka-e1-6	0	61	5	3	0	2	0	0	71		
		Ka-e1-7	0	53	0	0	0	1	1	0	56		
		Ka-e1-8-1	0	65	2	0	0	2	0	0	69		
		Ka-e1-8-2	0	7	0	0	0	1	0	0	8		
		Ka-e1-9	0	98	7	1	1	4	1	1	73		
	横長剥片素材	Ka-e2-1	0	36	4	0	0	3	0	0	43	336	
		Ka-e2-2	0	63	11	0	0	5	1	0	80		
		Ka-e2-3	0	110	18	0	0	9	3	0	140		
		Ka-e2-4	1	47	12	0	0	8	0	0	68		
		Ka-e2-5	0	3	1	0	0	0	1	0	5		
	握蜜錐石器	Ka-e3-1	0	72	9	2	0	7	1	0	91	188	
		Ka-e3-2	0	75	13	1	1	6	1	0	97		
	抉入石器	Ka-e4	0	40	2	2	1	1	0	0	46	46	
	小形剥片素材周縁調整	Ka-e5	0	9	2	2	0	1	0	0	14	14	
	二次加工のある剥片	Ka-e6	1	287	68	8	1	76	22	1	464	463	
	微細剥離痕のある剥片	Ka-e7	0	206	64	5	0	32	10	0	317	318	
	欠損分類不可	Ka-e8	0	136	9	2	0	6	0	0	153	153	
石錘	半両面加工	Ka-f1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1
	両面加工	Ka-f2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
打製石斧		Ka-g	0	0	2	0	1	0	0	1	4	4	4
楔形石器		Ka-h	0	4	0	0	0	0	0	0	4	4	4
異形石器		Ka-i	1	6	1	0	0	1	0	0	9	9	9
剥片		Ka-l	0	6	1	0	0	5	2	1	15	15	15
石核		Ka-m	1	46	33	1	1	28	10	0	120	120	120
未製品類		Ka-n	0	139	20	3	1	7	1	0	171	171	171
合計			32	2,994	626	94	11	605	306	5	4,673		



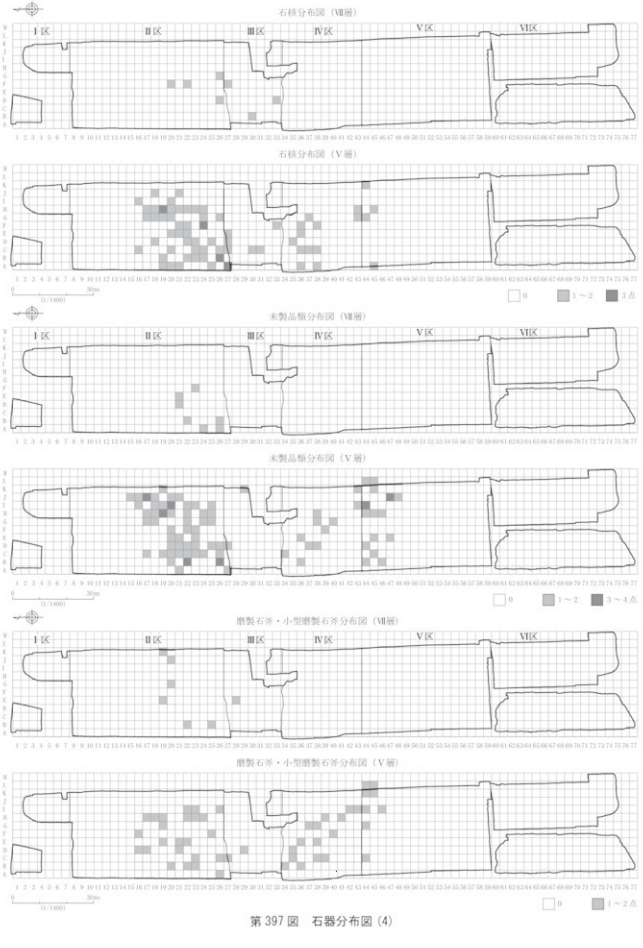
第 394 図　石器分布図 (1)



第 395 図　石器分布図 (2)



第 396 図　石器分布図 (3)



第 397 図　石器分布図 (4)

2．古墳時代以降

1）遺構の変遷

Ⅲ層上面からは、古墳時代から平安時代にかけての遺構と遺物を検出した。時期的には、断続的ながら古墳時代前期（塩釜式期）、奈良時代（8 世紀後半頃）、平安時代（9 世紀中～後葉）の 3 時期あり、それぞれ集落跡を検出した。9 世紀代の集落が廃絶したのち、畑跡の可能性が想定される小溝状遺構群が調査区のほぼ全域に展開することから、集落の廃絶後は生産域として利用されたと考えられる。

主な遺構の変遷については第 398 図に示した。

2）墨書土器

墨書土器は全部で 15 点出土しており、いずれも 9 世紀中～後葉の時期と考えられる。遺構からは、SI401・402・403・405・406、SK409 から 10 点出土している。SI401 からは墨書土器 2 点、SI402 からは墨書土器 2 点と刀子 2 点、SI403 からは墨書土器 3 点と刀子 2 点、ほかは墨書土器が 1 点ずつ出土している。

判読できる文字のうち、もっとも多いのは「罡」（「岡」の異体字）で、「罡口」と二文字で表記される例が多い。ほかに 1 点だけであるが「得」の文字が見える。

東北地方における「罡」の字の出土例として、これまでに墨書や刻書土器として 23 例が確認されている。その内訳は、宮城県 6 点、秋田県 3 点、福島県 14 点である〔青森県史編さん古代部会 2008〕。宮城県では、多賀城市の市川橋遺跡で 3 点、高崎遺跡で 1 点、東山遺跡で 1 点、それぞれ「罡」と一文字だけ記された墨書土器が出土しているほか、本遺跡に程近い仙台市太白区の富沢遺跡からは「罡マ」（「岡部」）と記された墨書土器が 1 点出土している〔仙台市教育委員会 1995〕。

墨書された文字の意味については不明であるが、遺構外から出土したものを含めてすべてⅣ区から出土しており、墨書土器の分布には偏在性がみとめられる。

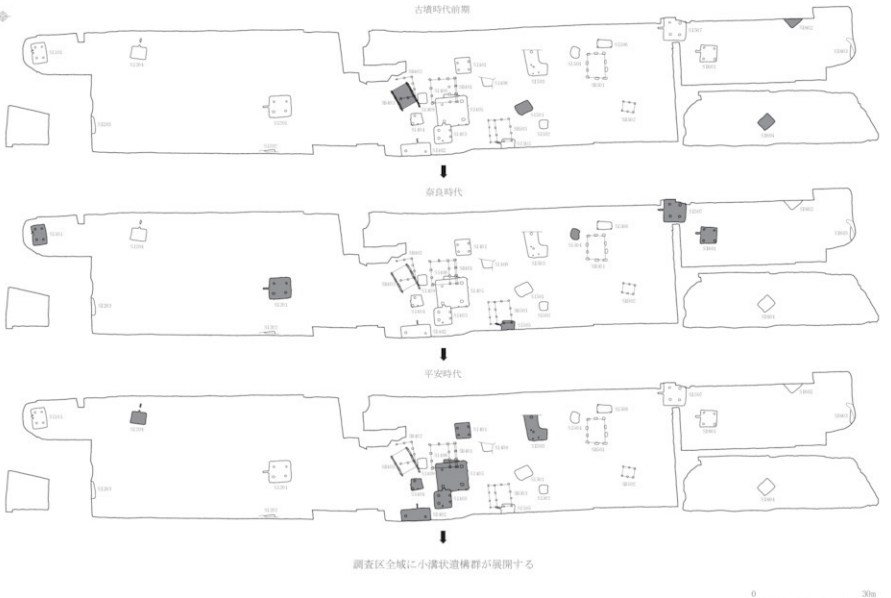
このほかに文字に関連する資料として、SI503 から須恵器製の硯 1 点、SD402 から須恵器坏の内面底部を利用した転用硯 1 点が出土している。

3．総　　括

大野田遺跡は、笊川によって形成された馬の背状に東西方向へ延びる標高 9 m前後の自然堤防上に位置している。遺構検出面は 3 面であり、Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ層の上面からそれぞれ遺構と遺物を検出した。Ⅲ層上面からは古墳時代から平安時代にかけての集落跡と生産跡が、Ⅴ・Ⅶ層上面からは縄文時代後期前葉の祭祀跡などが見つかった。

縄文時代

- 縄文時代の遺構は、Ⅶ層上面とⅤ層上面から検出した。両層の間には間層（Ⅵ層）を挟むが、出土した遺物からは明瞭な時期差は確認できず、双方とも後期前葉（南境式期）の時期と考えられる。Ⅳ区のⅤ層は、土層が細かく細分される部分があり、包含される遺物に細片が多く、炭化物や焼土、骨片、さらに小礫等が多く含まれていることから、自然堆積層ではなく、人為的に盛土・整地し、Ⅴ層上面で再び同様の遺跡を構築したものと考えられる。
- 調査区の地形は全体に平坦であるが、Ⅳ区が周囲よりわずかに高くなっており、両層の遺構はここを中心に分布が見られる。
- Ⅶ層上面からは、縄文時代後期前葉の遺構を検出した。遺構は、Ⅱ区からⅣ区にかけて、配石 37 基、埋設土器 37 基、土坑 196 基、性格不明遺構 1 基を検出した。柱穴状を呈する小ピットが多数見つかっていることから掘立柱建物の存在が想定され、配石、土坑を中心として周囲に掘立柱建物跡を配置した遺構の配置関係が考えられる。
- Ⅴ層上面からは、縄文時代後期前葉と一部晩期中葉（大洞 C_2 式期）の遺構を検出した。遺構は、Ⅳ区を中心に、竪穴遺構 1 軒、環状集石 1 基、配石 11 基、埋設土器 5 基、土坑 32 基、溝跡 1 条、河川跡 3 条、性格不明遺構 1 基を検出した。微高地であるⅣ区のほぼ中央に、直径 12 mほどの円礫をまばらに敷き詰めた環状集石 1 基と、配石



第 398 図　Ⅲ層の主な遺構変遷図

第 399 図　墨書土器分布図

図番号	登録番号	種　別	器　種	層	区	出土地点	墨書部位	方　向	釈　文	備　考
第 314 図 4	E-016	須恵器	坏	III	IV	S1401	体部外面	正位	「罡口」	
第 359 図 8	E-091	須恵器	坏	III	IV	D42 区	底部外面		「罡口」	
第 332 図 5	E-089	須恵器	坏	III	IV	SK409	底部外面		「罡口」	
第 321 図 4	E-046	須恵器	坏	III	IV	S1403	体部外面	正位	「罡口」	
第 320 図 5	D-035	ロクロ土師器	坏	III	IV	S1403	底部外面		「罡口」	
第 321 図 5	E-044	須恵器	坏	III	IV	S1403	底部外面		「罡口ヵ」	
第 359 図 9	E-092	須恵器	坏	不明	IV	C41 区	底部外面		「罡口ヵ」	
第 314 図 6	E-017	須恵器	坏	III	IV	S1401	体部外面	横位	「罡ヵ」	
第 317 図 2	D-086	ロクロ土師器	坏	III	IV	S1402	底部外面		「得」	
第 359 図 13	E-104	須恵器	坏	不明	IV	不明	底部外面		「口」	
第 318 図 3	E-033	須恵器	坏	III	IV	S1402	底部外面		「口」	
第 327 図 8	E-067	須恵器	坏	III	IV	S1406	底部外面		「口」	
第 325 図 13	E-080	須恵器	坏	III	IV	S1405	底部外面		「口」	
第 360 図 2	E-097	須恵器	坏	III	IV	D39 区	底部外面		「口」	
第 359 図 15	E-098	須恵器	坏	III	IV	E38 区	体部外面		墨痕	

第 400 図　墨書文字集成図

11基があり、その周囲に埋設土器や土坑、竪穴遺構などが取り囲むように位置している。Ⅱ区のSK210から焼けた骨片と骨角器が出土した。骨片には獣骨や鳥骨、魚骨があり、骨角器には離頭銛・ヤス・釣針などがある。焼けたために残存していたものと考えられる。ほかに河川跡が4条見つかっている。SR201はⅠ区からⅡ区中央にかけて、川幅の狭いSR301はⅢ区南側からⅣ区北側にかけて、SR501・502はⅤ区からⅥ区にかけて確認されている。SR501・502の堆積土はシルトを主体とし、植物遺体が含まれる土層が確認されることから比較的穏やかな流れであったと推測されるが、河床は深くⅨ層以下に及んでいる。いずれも後期前葉の遺構より新しい。また、上述した遺構のうちSR501上面で検出したSK614は晩期中葉の土坑である。後期前葉の遺構群から少し離れた調査区南端のⅥ区から大洞C$_2$式期の浅鉢を伴って1基だけ見つかったもので、ほかに該期の遺構や遺物は確認されていない。

・Ⅴ層は遺物包含層で、後期前葉の遺物を多量に包含する。
・縄文時代後期前葉の大野田遺跡は居住域からはずれた祭祀に関わる地域であったことが考えられる。
・また、遺構は検出していないが、ほかに中期中～末葉（大木8b～10式期）にかけての遺物が僅かに出土している。

古墳時代以降

・Ⅲ層上面からは、古墳時代前期と奈良・平安時代の遺構を検出した。
・調査区の地形は全体に平坦であるが、Ⅳ区からⅤ区にかけてわずかに高い。竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑など集落にかかわる遺構は、微高地であるⅣ・Ⅴ区を中心に分布が見られる。
・遺構は、竪穴住居跡10軒、竪穴遺構14基、掘立柱建物跡6棟、土坑74基、溝跡26条、小溝状遺構群27群、性格不明遺構3基を検出した。
・古墳時代前期の遺構として、SI501・602・604、SB403(SD403・404）を検出した。SI501・604からは塩釜式期の遺物が出土しており、このうちSI501から赤彩は確認できないが体部上半に櫛描文による加飾が施された土師器壺などが出土している。SI602、SB403は遺物の出土はないが、遺構の軸方位がSI501・604と近似していることから同時期の遺構と判断した。SB403は梁間1間×桁行3間の建物である。平側は、溝状に掘り窪めた掘り方(SD403・404）の中に長方形の柱掘り方を穿って柱を据えるもので、柱掘り方の中にはそれぞれ2本の柱痕跡が見つかっている。建て替え、あるいは、通し柱と床を支える添束(柱）である可能性が考えられる。また、遺構は検出していないが、終末期頃に比定される遺物がSD401の堆積土中から1点出土している。
・奈良時代の遺構として、SI101・201・504・505・507・601を検出した。このうち、SI101・201・504・601からは8世紀後半頃の遺物が出土している。SI505・507からは出土遺物はないが、SI101・201・601と同様、カマドが北辺に付設されていることからこの時期の遺構と判断した。なお、SI201からは鉄鏃が4点出土している。
・平安時代の遺構として、SI204・401・402・403・404・405・406・503を検出した。いずれも出土した遺物から9世紀中～後葉の時期と考えられる。SI204からは出土遺物はないが、SI401・402・403・405と同様、カマドが東辺に付設されていることからこの時期の遺構と判断した。SI503は「L」字状の平面形を呈するもので、須恵器製の硯と思われるものや刀子、鉄鏃などが出土している。
・また、SI202・203・408・409・502・506・603の7基は、遺構の大半が調査区外にあるものや出土遺物がないもので帰属時期は不明である。このうち、SI506は長方形の平面形を呈するもので壁際に柱を配している。カマドなどの付帯施設は検出していない。
・掘立柱建物跡は、Ⅳ・Ⅴ区から5棟検出した。このうちSB401・501・503の3棟は、梁間2間×桁行3間の東西棟建物で、SB401には南廂が、SB503には北廂が付く。SB502は梁間1間×桁行2間の南北棟建物である。SB402は北側の柱筋が不明であるが、梁間2間以上×桁行3間の建物と思われる。柱掘り方の平面形は、SB401・402は円形と方形、SB502・503は方形、SB501は規模の大きい長方形である。
・溝跡のうち2条一組で並走するものがある。Ⅰ区で検出したほぼ正確に東西方向へ延びているSD102・103と、Ⅱ区で検出したほぼ南北方向へ延びるSD201・202で、道跡の側溝である可能性が考えられる。規模はⅠ区で幅0.70～0.82m、深さ0.43m前後で、軸方位7.00m前後である。
・畑跡の可能性が想定される小溝状遺構群は、調査区のほぼ全域から27群検出した。時期を特定できるような遺物の出土がなく帰属時期は不明であるが、前述した9世紀代の遺構と重複し、それより新しいことから、9世紀代より新しい時期の遺構と考えられる。

・平安時代の出土遺物のうち、墨書土器が 15点見つかっている。いずれもⅣ区から出土したものである。判読できる文字のうち、もっとも多いのは「罡」（「岡」の異体字）で、「罡□」と二文字で表記される例が多い。ほかに1点だけであるが「得」の文字がある。このほかに文字に関連する資料として、S1503から須恵器製の硯 1点、SD402から須恵器坏の転用硯 1点が出土している。
・また、遺構は検出していないが、Ⅳ区から弥生時代の石包丁が 1点、Ⅲ区から中世以降のものと思われる茶臼（上臼）が 1点出土している。

引用・参考文献

安達尊伸・中村　直　2007 「門前式土器の周辺－地域性認識の試論－」『岩手県における縄文文化の諸相』 岩手考古学会
秋田かな子　2008 「加曽利Ｂ式土器」『総覧 縄文土器』（株）アム・プロモーション
秋田県教育委員会　2011 『漆下遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第 464 集
青森県史編さん古代部会編　2008 『青森県史 資料編 古代２ 出土文字資料』 青森県
稲村晃嗣　2008 「門前式土器」『総覧 縄文土器』（株）アム・プロモーション
岩手県文化振興事業団　1993 『新山権現社遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第 188 集
岩手県文化振興事業団　2012 『川目Ａ遺跡第５次発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第 589 集
植木　弘　1990 「土偶の形式と系統について」『埼玉考古 27 号』 埼玉考古学会
榎本剛治　2008 「十腰内Ⅰ式土器」『総覧 縄文土器』（株）アム・プロモーション
鹿角市教育委員会　2005 『大湯環状列石（Ⅰ）』 鹿角市文化財調査資料 77 集
鹿角市教育委員会　2010 『大湯環状列石（Ⅱ）』 鹿角市文化財調査資料 98 集
大迫町教育委員会　1979 『立石遺跡発掘調査報告書』 大迫町埋蔵文化財報告書第３集
加納　実　2008 「堀之内式土器」『総覧 縄文土器』（株）アム・プロモーション
菅野美香子　2012 「秋田県漆下遺跡出土縄文時代後期土器の変遷案について」『研究紀要 27 号』 秋田県埋蔵文化財センター
北秋田市教育委員会　2011 『伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書』 北秋田市埋蔵文化財調査報告書第 13 集
縄文セミナーの会編　1990 『縄文後期の諸問題』 第４回縄文セミナー
縄文セミナーの会編　1996 『後期中葉の諸様相』 第９回縄文セミナー
縄文セミナーの会編　2002 『後期前半の再検討』 第 15 回縄文セミナー
縄文セミナーの会編　2012 『縄文後期土器研究の現状と課題』 第 25 回縄文セミナー
鈴木克彦　2008 「宝ヶ峯・手稲式土器」『総覧 縄文土器』（株）アム・プロモーション
鈴木徳雄　2000 「縄紋後期浅鉢形土器の意義－器種と土器行為の変化－」『縄文時代 11』 縄文時代文化研究会
仙台市教育委員会　1981 『山口遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 33 集
仙台市教育委員会　1987 『六反田遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 102 集
仙台市教育委員会　1995 『伊古田遺跡－仙台市高速鉄道関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ－』 仙台市文化財調査報告書第 193 集
仙台市教育委員会　1995 『富沢・泉崎浦・山口遺跡（8）』 仙台市文化財調査報告書第 203 集
仙台市教育委員会　1995 『六反田遺跡－仙台市高速鉄道関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ－』 仙台市文化財調査報告書第 199 集
仙台市教育委員会　1996 『下ノ内浦・山口遺跡－仙台市高速鉄道関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ－』 仙台市文化財調査報告書第 207 集
仙台市教育委員会　2000 『王ノ壇遺跡－都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡 発掘調査報告書Ⅰ－』
仙台市文化財調査報告書第 249 集
仙台市教育委員会　2004 『元袋遺跡－都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡 発掘調査報告書Ⅱ－』
仙台市文化財調査報告書第 272 集
仙台市教育委員会　2011 『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか』 仙台市文化財調査報告書第 390 集
仙台市史編さん委員会編　1995 『仙台市史 特別編２ 考古資料』 仙台市
仙台市史編さん委員会編　1999 『仙台市史 通史編１ 原始』 仙台市
高橋圭次　1987 「安達郡岩代町永畑遺跡出土の特殊片口鉢」『福島考古 第 28 号』
高橋忠彦　1989 「秋田県の縄文時代後期の土器」『研究紀要 4 号』 秋田県埋蔵文化財センター
福島県教育委員会　1985 『荒小路遺跡－母畑地区遺跡発掘調査報告書 19 －』 福島県文化財調査報告書第 148 集
福島県教育委員会　1989 「中平遺跡」『国営請戸川農業水利事業遺跡調査報告』 福島県文化財調査報告書第 208 集
本間　宏　2008 「南境・綱取式土器」『総覧 縄文土器』（株）アム・プロモーション
宮城県教育委員会　1984 『二屋敷遺跡－東北自動車道遺跡調査報告Ⅸ－』 宮城県文化財報告書第 99 集
三戸部秀樹　2004 「山形県の後期前半の土器について」『研究紀要 2 号』 山形県埋蔵文化財センター
山形県教育委員会　1990 『川口遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 151 集
山形県教育委員会　1997 『津谷遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 46 集
山形県教育委員会　2003 『かっぱ遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 114 集
陸前高田市教育委員会　1992 『門前貝塚発掘調査報告書』 陸前高田市文化財調査報告書第 16 集